

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.15

2012.1

柳生直行先生特集

目次

| | |
|------------------------------|----|
| 柳生直行先生主要著訳書と新約聖書翻訳ノート写真 | 1 |
| 柳生直行訳『新約聖書』の香り | 2 |
| 柳生直行訳『新約聖書』出版の意義 | 4 |
| 柳生直行訳『新約聖書』紹介 | 6 |
| 柳生直行著『お伽の国の神学—C・S・ルイスの人と作品』 | 8 |
| 柳生直行著『生一本のキリスト教—お伽の国の倫理学—』紹介 | 11 |
| 信仰・学問・お伽話～柳生直行先生との対談 | 12 |
| 柳生先生の思い出—故柳生直行先生の学風 | 17 |
| TWO CASES FOR CHRISTIANITY | 18 |
| IN MEMORIAM NAOYUKI YAGYU | 19 |
| 充実した時間～柳生直行師との出会い～ | 20 |
| 関東学院の源流を探る | 21 |
| 柳生直行先生 著作目録 | 26 |
| 柳生直行文庫の紹介 | 34 |
| タッピング一家と宮沢賢治 | 35 |
| 柳生直行先生と関東学院シェイクスピア英語劇 | 36 |
| 資料・情報提供のお願い | 36 |
| 編集後記 | 36 |



柳生直行先生（1985年春撮影）

◀柳生直行個人訳『新約聖書』翻訳ノート
上左から「聖書翻訳ノート(2)」「新約聖書 翻訳ノート」「聖書翻訳ノート(1)」／下左から「校正(ノート)」「新約聖書 翻訳について(ノート)」「用字法(ノート)」(いずれも関東学院大学図書館所蔵)



◀柳生直行先生主要著訳書
左から『新約聖書』(1985年、初版、皮装丁)、『新約聖書』(1985年、初版)、『新約聖書』(1986年、特装版)、『お伽の国の神学—C・S・ルイスの人と作品』(1984年、初版)函ケース、同左本体、『生一本のキリスト教—お伽の国の倫理学』(1987年、初版)、『おのれを低くする者—柳生直行講話集』(1988年、初版)

柳生直行訳『新約聖書』の香り

聖学院大学大学院教授・NPO法人 今井館教会 理事長 新井 明

1

柳生直行というお方の名を知ったのは、半世紀ちかくも昔のことである。相川高秋教授に捧げる『神学と文学の間』という論書類が1965年に出た。その書評を『英語青年』から依頼され、この一書で柳生先生の『失樂園』と現代」なる論文に出会った。この論文にいたく感銘したわたしはこのミルトン論を「記憶さるべき労作」と評させていただいた（『英語青年』1965年10月号）。柳生先生が新井などという若造の名を知っておられるはずがない。調べられたらしく、その若造は先生の出身校、東京文理科大学の後進・東京教育大学の出であることが判り、「それならば後輩だ。一度会ってやろう」という気をおこされたらしい。数年後、横浜駅の東急ホテルのレストランに呼び出されたのは、調べてみると、1969年6月6日のことであった。緊張して出向いたわたしも、先生のお人柄にほれ込み、その後はなにかとお親しくしていただいた。

2

その先生から1985年春に柳生訳『新約聖書』（新教出版社刊）をお贈りいただいたときには、驚いた。先生のミルトン論を拝見していらい、約20年は経っているのだが、先生がこのようなお仕事をしておられるとは存じ上げなかった。

じつはわたしは戦後の荒廃した時代に内村鑑三という人物の著作にめぐりあい、家の宗教を捨ててキリスト教の世界に入った。そして1953年からは前田護郎なる若手の聖書研究者が始めた集会に通うことになる。その後の滞米生活、名古屋での学究生活—その時代に柳生先生のミルトン論の書評を書いた—を経て、東京の母校に移り、1969年に、柳生先生に初めて横浜でお会いすることになる。学園紛争たけなわの頃であった。

ところでその前田護郎は1980年4月に召された。『聖書愛読』という個人雑誌を、「ひとり学ぶ友に」という副題を掲げつつ、4半世紀ちかくの日時をつかい、194号までを出した。新約聖書の訳は毎号少しずつ註を付しつつ載せていった。逝去以前に一応完訳したかたちであった。出版は中央公論社が引き受けていた。しかし、このままでは前田訳聖書の出版はありえない。前田家はその出版の仕事を新井に委託した。前田訳聖書全体のことばの調整・整理、別ポイントで出てくる

膨大な欄外註の確認作業、その他。途方もない時間と神経を要した。それが実際に出版されたのは、満3年以上を経た1983年末のことであった。専門外の新井にとっては、苦渋に満ちた年月であった。ただし、聖書の世界により深く接近することが許されたという意味においては、幸せな経験であったというべきであろう*。

3

この仕事を終えて一息ついていたころ、1985年の初春、「恵存 柳生直行」という署名入りの『新約聖書』が届けられた。それを手にして、わたしは「驚いた」と上に書いた。ほんとうに「驚いた」のである。（先生は前田訳の存在を知ってはおられたことであろう。しかしその出版に、新井という後輩が関わっていたことなど知る由もなかったはずである。）わたしは柳生訳を一読し、再読した。一般人のことばが簡潔に生きている聖書の世界が、ここには出現しているのだ。聖書学者ではないお方の、その意味でのかなり自由なことばの世界が、ここにはある。「マタイ福音書」冒頭の「イエス・キリストの系図」は、普通はよく読み飛ばされるところである。人名の羅列が人を飽きさせる。たとえば「バビロン追放」という言い方が2度出る（1：11、12）。柳生訳では「イスラエル人がバビロン強制移住させられたころのこと」となっている。イエスが生まれるや、「星の研究者である東方の博士たち」がエルサレムにやってくる。ヘロデ王は「その子」を見つけ次第、報告するようと申しつける。王のことばを「承って」博士たちは出発する。

現行邦訳は一人称と二人称を「わたし」「あなた」で統一してある。しかしそう訳すことで、聖書での会話は日常口語から離れるのである。柳生先生はそのことをご存知で、数多くの人称代名詞を使い分けておられる。イエスとサマリアの女との対話をみていただきたい（ヨハネ福音書4章）。女ははじめ、「あんたはユダヤ人でしょう？」と訊く。いかにも下卑た言い方だ。その女は、やがてイエスに畏怖をいだくようになると、「あなた」、さらには「あなた様」と呼びかけてくる。はじめ女は自分のことを「あたし」とよんでいるのが、「わたくし」と変わってくる。読者に臨場感があたえられ、改悛へと向かう女のこころの動きが、じかに伝わってくる。

日本人は母に呼びかける場合に、まさか「婦人よ、あなたは…」とは言うまい。柳生訳は「お母さん」と呼びかけるか、省いている。人称代名詞の使い分けによって、自然とわかるようにしてある。12歳のイエスが母と語るとき、自分を「ばく」と呼ぶ。マリアは夫ヨセフのことを息子に語るときは、「お父さん」と言う（ルカ福音書2：48-49）。百卒長の口からは「…のであります」と、軍隊調が出る（ルカ福音書7：8）。

翻訳とは単語を単語に移すのではなく、原文の意味を汲み上げて、それをきちんとした現代日本語に生かすという仕事であるから、全体の分量は現行訳より多少はふえているのであろう。しかしじっさいの印象として、柳生訳は簡勁である。「主の祈り」（マタイ6：9-13）なども、現行の新共同訳よりも、やや短い。全体的に、達意の日本語である。C. S. ルイスの研究者・訳者としての先生のことばである。

戦後、日本聖書協会が聖書の口語訳を目指したときの、翻訳の原則のひとつに、公の朗読に適した格調ある文体へ、という申し合わせがあった。この「公」とは、要するに「教会」「礼拝」ということであろう。しかしいまは、聖書は開かれた使命をもつ公器として、公共の場—世俗の日本語の世界—へと堂々出て行くべき時である。一般日本語の世界で朗読されて、なお範となるべき品格を備えていなくてはならない。そのような現代語訳の達成を真に願うならば、他の優れた個人訳とともに、いや、先ず第一に、柳生訳の勇氣と知恵とに多くを学ぶべきである。そう思ったわたしは新教出版社から柳生訳聖書の書評を頼まれたときに「日本キリスト教界における、近來稀の慶事」であり、「勇氣ある事業」と呼ばるべき大業である、と絶賛させていただいた覚えがある（『福音と世界』読書特集「新教」1985年春季号）。ひとつには、新教出版社が創立40周年記念事業として、この柳生訳を出版することに決した、その勇氣を称えたい気持ちもあった。これは今だから言えることに入るであろう。

4

その先生の訳業の上梓を記念して、関東学院大学は「翻訳聖書出版記念祝賀会」を開かれた。1985年7月6日の夕べ、横浜東急ホテルでのひとときであった。わたしには予め、「文学研究者としての柳生先生」というタイトルで何かを語れ、とのお達しが届いていた。

じつはその席で同席したのが、すぐ書房主・有賀寿氏であった。氏は、つとにマシュー・ヘンリ(Matthew Henry, 1662-1714)の聖書注解の翻訳・出版を念じておられ、柳生先生とそのことで相談をしておられたらしい。先生はその企てに賛意を表され、ついでに新井の名を出されたいらしい。そのうち3人で会って具体的な相談をするということになった。が、そのころ先

生のご健康に異常が発生し、1985年は過ぎてしまった。翌1986年の6月3日に有賀氏とわたしは柳生先生のお宅をお訪ねするというようになっていた。（先生はご自宅の手書きの地図までお送り下さっていた。）しかしその機会は与えられず、その9月にご逝去。地図を頼りに、ご自宅に伺い、ご葬儀に列した。このご逝去がその後マシュー・ヘンリの「マタイ福音書」の訳業を、わたしに決定づけた。その訳業は1988年に第1巻を出し、2009年の第9巻にいたる、（共訳者にも恵まれた）20年をこえる仕事となった。すぐ書房も新井訳の完成をもって使命を終えた。

5

柳生先生を通してお知り合いになれたお方に、高野進先生がおられる。H. W. ロビンソン『バプテストの本質』（1985年）、『関東学院教育の群像』（1994年）、『A. A. ベンネット研究』（1995年）などなどを頂戴している。その高野先生から、小学校卒業ま近かの6年生（と、かれらの父母）のために一時間ほどの話をしてください、というお願いがあった。調べてみると、それは1995年3月13日に実現している。山の道を登っていった。お話を終えて、帰りがけに発見したことだが、小学校の入口に、もう10年近く前に逝かれた柳生先生の『新約聖書』の一筋が書き出されていた。

最近、柳生先生のことを思い出し、懐かしくなると、関東学院大学の学内の散策に出かけた。できることなら、あの柳生先生訳の一筋にまた出会いたかった。しかし見つからなかった。そこへ学院史資料室の瀬沼達也先生が呼び出されて、出てきてくださった。先生は直ちにわたしを三春台の関東学院小学校へ連れて行ってくださった。坂田祐先生の「人になれ、奉仕せよ」のことばの近くの、現小学校の入口に柳生先生訳のパウロのことばが金属板に黒字でしたためてあった。16年ぶりの再会であった。（ことによると、柳生先生自らの筆であるかもしれないと思った。）

「兄弟たちよ。すべて真実なこと、尊敬すべきこと、正しいこと、純粋なこと、愛すべきこと、人々に喜ばれること、それに、道徳的にすぐれていること、また称賛に値すること—すべてこういったことに思いを致しなさい。…そうするなら、平和の神があなたたちと共にいて下さるであろう」（ピリピ書4：8-9）。

その後、2週間ほど経って、もういちどその山道を登っていった。柳生先生の香りがした。

*前田訳の「新約聖書」は月本昭男氏を中心とする経堂聖書会七人会により、「前田護郎選集」の「別巻」として、2009年7月に教文館より改定・出版された。

柳生直行訳『新約聖書』出版の意義

学校法人平和学園前学園長・単立湧泉教会協力牧師 夏村 充

新教出版社創立40周年記念行事として、1985年2月に柳生直行訳『新約聖書』初版が出てから26年の年月が過ぎています。出版当初から高く評価され、その意義についてはすでに多くの論稿が寄せられています。改めてその意義について述べるとするならば、いまだのように読まれているか、報告することにあるのではないかと考えます。

柳生直行教授は優れた教育者、英文学者、そして牧師でした。奉仕されていた湧泉教会(茅ヶ崎市)では、現在『新共同訳聖書』に併せて柳生直行訳『聖書』を用い、柳生二三夫人のオルガン奏樂の奉仕に支えられて礼拝が献さげられています。併読することで、委員会訳とは違って翻訳者の人柄を読み取ることができます。

(一) 教授は『ナルニア国』の大使であり、すでに『おとぎの国』の市民であったのでしょうか、大学人らしい強烈なスパイスの効いたユーモアを、そして些事に拘泥せず、ニーチェからパスカルまで多士済々、『おとぎの国』へ招待なさっては、「キリスト教は逆転の思想」であることを説いておられたご様子など柳生教授の論説を通して伺うことができます。教養人の自在を持って、「キリスト教は私にとって面白くてやめられないんです」(『逆転の思想』)と述べていらっしゃいました。翻訳された『聖書』を読みながら、その人柄に触れることも多くあり、訳語の語調や言葉の響きから、息づかいまで感じとれます。すべからず個人訳聖書は、選び取った語句や訳文から、翻訳者が神の前に生きた信仰者としてのつつましい姿勢にふれることができます。聖書翻訳が最晩年の仕事であったことを考えると、かつて小玉晃一教授が「この翻訳は柳生氏の信仰告白であり…」と述べておられた通りであり、そのことを出版第一の意義と考えます。

柳生教授は、「日本語として読める聖書、通読に耐える聖書、したがって従来のものとは違った文体とリズムとテクスチュア(肌合い)を持った聖書を目指して、訳業に取り組んだつもりである」と「訳者後記」に記しています。

翻訳の直接の動機が『口語訳聖書』に対する丸谷才一氏をはじめ、竹山道雄氏や川村次郎氏などによる「きびしい批判」にあったと言います。「私にとってかねてから不思議でならないのは、これほどの酷評を受けながら、教会内部から、これら文学者たちのチャレンジを正面^{まとも}に受けて立ち、日本語の文体で勝負すること

を第一目標として、聖書の改訳に取り組もうとする者が一人も現れなかったことである。」と述べています。これが翻訳者自身が言う動機であるとすれば、批判に対するチャレンジ、応答としての翻訳であるといえます。学究を務めとする者の誠実な良心的責任を負うた業績であると考えられます。

(二)「敷衍訳(パラフレーズ)」ではないか」との批判に対して、柳生教授はユージン・A・ナイダ教授がヒエロニムスの翻訳を評した言葉を引用しながら、「言葉を言葉にうつすのではなく、意味を意味にうつすこと——これはすべての翻訳者のもって金科玉条となすべき名言である」と述べ、「世の翻訳者たちがみなこの教訓を守ったなら、横のものを縦にただけの悪訳はすべて姿を消すであろう」と論じておられました。以下、湧泉教会の礼拝での学びの中から、翻訳上の事柄について二、三申し述べます。

①「善きサマリア人の譬」《ルカ福音書10章27～37節》から

①の1 律法学者の物言いについての翻訳

「ひとりの律法学者がきて、イエスをわなにかけようとして言った」《25節》

下線部分の語は“ἐκπειράζων”で、語義的には「悪意を持って試験する、誘惑する」の意です。口語訳でも「試みようとして」、新共同訳でも「試そうとして」と訳出しています。ところが柳生訳では物語全体を俯瞰し、問答後の律法学者の態度を読み取り、その上で訳語が選択されているように思われます。その選択が適切であることは容易に理解できます。律法学者の物言いは次の通りです。

「だがその律法学者は自分の専門の知識をひけらかそうとして」《29節》

口語訳は「立場を弁護しようと思って」、新共同訳は「正当化しようとして」と翻訳しています。“δικαίωσαι”は(RSV)は“command”の婉曲的語“desire”と訳されており、柳生教授は存分にエスプリを効かせ、よくある学者の衒いまで織り交ぜながら訳出しています。当時の聞き手たちは、律法学者と聞くだけで、その人物像を容易に描けたことでしょう。21世紀の読み手にも容易にその人物像が描けるように訳出する必要があります。

①の2 「たとえ話」が語られるリズムについての翻訳《30～35節》

物語を翻訳する場合、書き手の、この場合は話し手である主イエスのというべきでしょうか、その声の調子や言葉のリズムの訳出には注意が払われるべきで、原文に沿うようにその場面を訳出する場合、文体が問題になります。

柳生訳では、「ある人」が襲われた場面では、文節を短く、句読点を多用し、速いテンポで人物像が生き生き、リアルに描きだされています。襲われた人の傍を通りかかった一人は「祭司」、もう一人は「レビ人」ですが、句読点で切られている文節の語尾には、同じ母音が繰り返されるように訳出に工夫がなされています。

*祭司の場合・「が(ア)」、「が(ア)」、「と(オ)」、「て(エ)」、「た(ア)」。

*レビ人の場合・「が(ア)」、「が(ア)」、「と(オ)」、「て(エ)」、「た(ア)」

*サマリア人の登場で、音韻に含まれているリズムは変化します。

音節やリズム、それに韻などは、話し手の息づかいや肉声に触れられるような親近感を呼び起こす効果があります。柳生訳には、書簡において特にそうですが、大学で演劇を指導されていた経験が随所に表れているのでしょうか、音韻のふみ方や句読点のふり方が丁寧で、それは語意の正確さだけでは表現しきれない、語感にまで及ぶ翻訳の可能性を広げています。

②「マルタとマリアを訪ねる」《ルカ福音書10章38～42章》から

マルタは「イエスを自分の家に迎え入れた」女性です。当然、喜んで自分から進んで接待の準備を始めたことでしょう。心からもてなそうとして「頭を悩ます」ことになったのであって、この場合、決していやいやながらでなかったことが前提になります。そこで、マリアはと見れば「主の足もとに座って、その言葉に聞き入って」いました。そこでマルタはいいます。「主よ、妹がなんにもせず、わたしばかり働かせて、それでいいとお考えですか。腰を上げて、わたしを手伝うようにいってくださいまし。」と。この言葉は、マルタの抗議であると早飲み込みして簡単に翻訳できるような代物ではありません。さて、柳生教授はここで突然「～まし」と、雅語を用います。この助動詞・特殊型の「まし」は、「事実とは異なる状態を推測して、そうあったらいいのにと希望する意を表します」（佐藤定義編『詳解古語辞典』による）。確かに「いろいろ頭を悩ましていた」《40節》は、前述のとおり語義的には《41節》の“*θορυβόζη*”とは違って“*περιεσπᾶτο*”、つまり共同訳では「いろいろのもてなしのためにせわしく立ち働いていた」と訳されているように、語義的には「～のことで忙殺されている」であって、柳生訳のように、語義的には《41節》と同じく「いろいろ頭を悩ましていた」とは訳くされにくい言葉です。しか

しなぜ柳生訳は、異なる二つの言葉を同じように訳したのかですが、それはコンテクストから読み取れるマルタについての解釈によります。

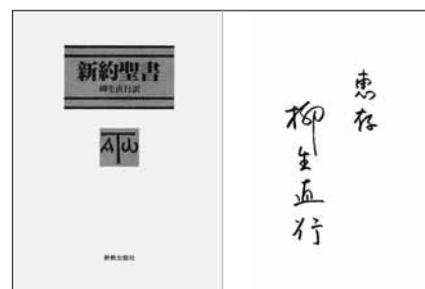
マルタは主イエス一行を迎え入れ、旅人を進んでもてなしている女性です。ですからマリアのことで、主イエスに物申すときにも、「～言ってくださいまし」と、言葉の響きには、依然として親しみの感情（気持ち）が残っていると読み取れます。主イエスは「いろいろ頭を悩ましていた」マリアの気持ちをそのままくみ上げてか、「マルタよ、マルタよ」と、終助詞「～よ」をつけて繰り返し呼びかけることで、マルタの残余の情を受け止め思いを込めてあの言葉「そなたは・・・さまざまなこと頭を悩ましていた」と言葉がけをします。

柳生教授の翻訳の方法である「意味を意味に移す」の作業が果たされているのであらうと感じられます。柳生教授の弁は次の通りでした。「文法的二者択一ではなく、ギリシャ語で物考える人間にとって自然な統一を形成したにちがいない複数思考の結合——だが翻訳においては異なる表現を必要とする——を考えるべきであるかも知れない。」

主イエスが弟子たちや人々に呼びかけるときに使われた代名詞「そなた」が論議されていました。それも柳生教授その方が、イエス・キリストに信託している畏敬の念、即ち信仰の告白から選びとられた言葉であらうと考えられます。

(三) 聖典である聖書は、すべてが写本の翻訳本です。「日本語聖書も『神の言葉』」（浜島敏・キリスト新聞社）と言われる所以でもあります。

おそらく、初代教会においては、書き手との親和関係において書簡が読まれていたことでしょう。同じく、関東学院においても湧泉教会においても、柳生直行訳『新約聖書』はその人格的にかかわりの中で親しく読まれていることで、よくある『聖典』の棒読みは避けられると考えます。また個人訳聖書は優れた神の言葉の、コメンタリーに思われます。読み手は自分の言葉を選びとりながら、しかも主体的に、神の言葉への応答をする信仰の自由が与えられているように思われます。21世紀に生きるキリスト者の幸を感じています。このことにこそ、聖書個人訳の広義としての意義があると考えます。 以上



▲柳生直行訳『新約聖書』見返し&扉頁（学院史資料室所蔵）

柳生直行訳『新約聖書』紹介

(新教出版社、1985年刊、558頁)

元関東学院宗教主任・元関東学院大学文学部教授 大島良雄



ヘボン、S・R・ブラウン、グリーンなどが主になって1872年翻訳委員会が組織され、^{プロテスタント}新教各教派の宣教師が協力して新約聖書翻訳の事業に当たり、1880年4月『新約全書』として完成、出版した。一方、N・ブラウンはアメリカ・バプテスト派の宣教師として1874年に委員会に加わったが、バプティゾーの訳語をめぐって委員と意見を異にした外、独自の翻訳論（ギリシア語原典重視・ひらかな聖書）のため、委員会を離れ個人訳聖書の翻訳に精進し前記『新約全書』より8ヵ月前の1879年8月に、日本における最初の新約聖書を完訳出版した。

関東学院の前身、横浜バプテスト神学校が設立されたのは1884年10月であるが、初代校長はA・A・ベンネットであった。彼はブラウンの依頼により川勝鉄弥の助けを得て新約聖書の改訂に当たった。それから百年後、学院長柳生直行先生が、個人訳の新約聖書を翻訳出版された事は学院の歴史に於て象徴的な出来事である。

本年は聖書協会の口語訳聖書が完成した1955年から数えて30年の記念すべ年である。それ以前の1917年に新約聖書は文語で改訳され、旧約聖書は1888年の元訳（文語）が聖書として用いられていた。しかし、時代は文語訳に代えて口語訳の出版を要請し、それに応えて訳出されたものが、スタンダードのものとして広く使用されている。

しかし、口語訳聖書出版の前後から、欧米における場合も同様であるが、聖書に関する学問的研究、資料の新たな発見などにより聖書の原典により近いギリシア語本文からの翻訳が求められるようになった。また漢字の略字化、字数の制限等の用法上、さらに表現上の変化が新しい翻訳を要求した。それに加えて聖書を大衆に近づけようという要求が起った。C・S・ル

イスは「聖書はもともと民衆的なもので、ギリシア語の原典も文学的な作品ではなく、厳粛な教会的な用語で書かれたものでもなく、むしろギリシア語が国際語となった後の東地中海地方で話されていたようなギリシア語本来の美しさや精妙さを失ったものであった」と、聖書本来の姿を明らかにして大衆への復帰の必要性について語った。勿論、その事は通俗的になり野卑に墮してよいというのではなく、欽定訳聖書、ルター訳聖書、1888年の日本語訳聖書がそれぞれの国に於て果たした様な役割が新しいものに期待されている。

それらの、時には矛盾すると思われる要求を含んだ困難な翻訳に多くの人々が挑戦し、前記の口語訳の外、共同訳、新改訳、フランシスコ会訳などが委員会訳として出版され、キリスト新聞社の口語訳、塚本、前田、尾山、バルバロ訳などの個人訳、リビングバイブルの様なパラフレイズ訳、更に『聖書の世界』の様に敷衍訳を採用しながら、各書を個人が担当して編集されたものなど十指に余る翻訳がそれぞれの特徴を持ちながら公にされて来た。

このような状況のもとにあって、あえて新しい翻訳を企てる事は大変勇気のいる事であると同時に、これまでのもので満たされなかった問題を解決するものでなければならぬ。柳生先生の意図をその「後記」のなかから拾ってみると、「私は、まず日本語として読める聖書、通読に耐える聖書、したがって従来のもとは違った文体とリズムとテクスチュア（肌合）を持つ聖書を目指して、訳業に取り組んだつもりである」と、その意図することを語っておられる。

また訳文については「かなり自由かつ大胆にテキストを噛みくだいて訳した所があり、全体の分量も現行訳に比していくぶん増えているので、これを敷衍訳（パラフレーズ）と見る方もおられるだろうと思う。……しかし訳者としてはパラフレーズを意図したわけではない」と、述べた後で、「私にも方法論と言えるようなものが一つだけある。それは、言葉を訳すのではなく意味を訳す」、意味を意味にうつすことであると言う。

高木幹太氏は、ローマ書5・6の訳文を例に引いて「……ギリシア語の原意を正しく踏まえていて、しかも私などに思いも及ばなかった凄いい日本語訳ではないか。私は思わずうなったのも無理からぬ事である。万事がこの調子で先生訳は一貫していると言ってよろし

く、実に見事という以外にはない」とその感想を述べ、更に、「協会訳も含めて今まで出された口語訳のすべてのうち、最上のものが柳生訳であろうと私は断言できる。先生はこれによって日本人に最上にして不滅の贈物をなされた」と言う。そしてこれは、柳生訳聖書を読む者の共通の印象であろう。

柳生先生はこの訳業をもって完全であるとは自負しておられない。「その格調・緊張度・優美さにおいてかの大正6年の文語訳にも迫る日本語聖書を、『口語体』ならぬ『現代文体』によって完成してくれる人々の続いて現われんことを期待してやまない」と、学者的謙遜さを披瀝しておられる。また信仰的にもまことに謙虚で、「父なる神がこの貧しい訳業をも潔めて、福音宣教の一助としてお用い下さるように、と祈るばかりである」と、その胸の裡を明かにしておられる。そして、そこから自由にして大胆、明解にして臨場感の溢れる訳文が生まれたのである。

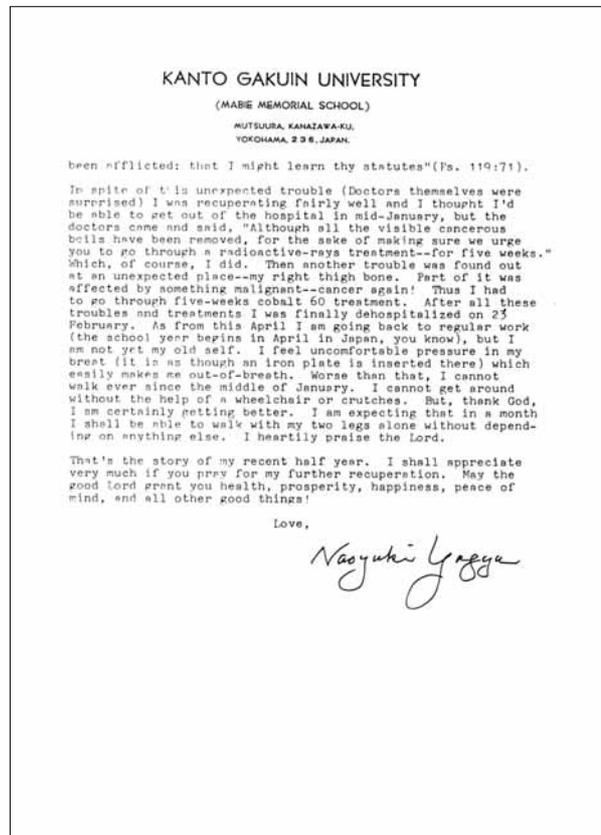
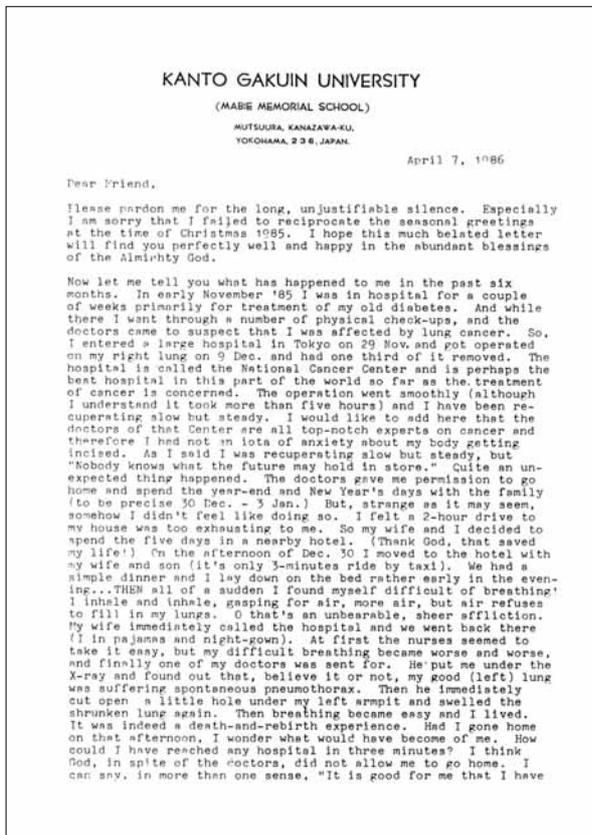
最後に一言したい事は委員会訳と個人訳との比較であるが、委員会訳は委員の協議によって慎重に訳出され、或る場合には没个性的な合意的な訳文になり、一方では学問的に正確であり内容的に堅実であっても、直訳的、中庸的になり、自由、大胆、個性的なものにはなり難い。しかし、個人訳では訳者の意図、強調する事を明確に表現する事が可能である。柳生訳はあらゆる意味で個人訳の持ち味を最大限に発揮したものであり、限らない魅力を秘めている。

通常の新刊紹介と趣きを異にした所以は、新約聖書そのものは周知のものであり、その内容については紹介するまでもない。それ故関東学院にとっての意義と聖書翻訳の背景、類書との関係について述べた。自ら読んで訳者の祈りと願いに応じてほしい。

(1985年7月1日付、学校法人関東学院発行
『いんまぬえる』No. 35からの転載)

柳生直行先生の最期の英文書簡

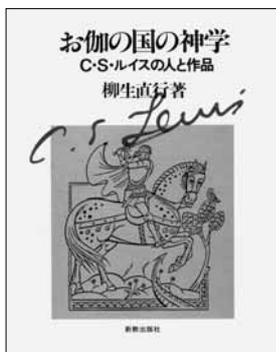
(友人宛て1986年4月7日付)



▲1986年4月7日に柳生直行先生がタイプライターで作成し、「The Canadian C. S. Lewis Journal」の主幹スティーヴン・スコフィールド氏に送付した書簡の写し(柳生二三氏所蔵)

柳生直行著『お伽の国の神学—C. S. ルイスの人と作品』

(新教出版社、1984年、438頁)



▲外函

C. S. ルイス (1898～1963) は、広がりと思議さをもった作家である。彼の本職は、英文学者である。オックスフォード大学で学び、25歳で同大学のフェローとして選ばれ、英語・英文学を教え、約30年ののち、ケンブリッジ大学の中世・ルネサンス英文学講座の主任教授として没年まで尽力した博学な英文学者であった。オックスフォード大学とケンブリッジ大学の両方で英文学を講じたというだけでもルイスが尋常の英文学者でなかったことを示している。しかし、ルイスの非凡さはそれに留るのではない。彼は64歳にわたる生涯のうちで、60冊に及ぶ書物を記し、広汎な読者を得、その発行部数は、主要な著作に限っても、5000万部をこえるといわれている。本書の巻末には、ルイスの著作の一覧が記されているが、それによると、語学・文学に関するものが16点、キリスト教書24点、自伝・手紙4点、詩4点、童話7点、SF三部作3点、小説・物語2点があり、その数は60冊を数えている。カール・バルトの教会教義学が9000頁に及ぶ龐大なものであり、K. S. ラトレットが七巻に及ぶ『基督教拡張史』を記したのちになお五巻にわたる『変革期の基督教史』をものしたことも驚くべきことであるが、それらは、自己の専門とする領域に集中した労作であった。ルイスの場合は、自己の専門の領域の英文学以外の作品が多く含まれていること、しかも神学者ではなく英文学者であるルイスの神学的作品が現代人に驚くほどよく読まれているということ、また、ナルニア物語のようなメルヘン、さらに幻想性とんだSF三部作などがその中には含まれていることなど不思議な感じさえする。

本書の第一章の「大学教授対悪魔」でとりあげられている『悪魔の手紙』(The Screwtape Letters, 1942)などは、彼自身は代表作と考えていなかったようだが、幅ひろい読者層にアピールし、各国の言葉に訳されている。わたしがC. S. ルイスを知るようになったのもこの書物によってであった。昨年わたしの演習をとっていた学生の中で二人は、C. S. ルイスを愛読していた。大学の一般教養の英語のテキストで『四つの愛』(The Four Loves, 1960)を読んだことがきっかけとなり、現在はナルニアにこっているということであ

同志社大学名誉教授 竹中正夫

あった。

もう一つ、最近ルイスの名を耳にした経験をのべさせていただくと、昨年6月関西セミナーハウスで開かれた「生命の意味」についての研究会で京都大学医学部精神科の大橋博司教授が人間の精神性の涵養について語られたとき、C. S. ルイスの『キリスト教の精髓』(Mere Christianity, 1952)のなかに、個々の人間が生命を保って伝染的(contagious)に生きる姿にふれていることを指摘された。それをきいてわたしは「はあはあここにもルイスが生きているのか」と今更の感を深くした。

キリスト者の数が1%にすぎないわが国においても、C. S. ルイスは可成り影響力をもっている。再び本書の巻末の文献表をみると、邦訳文献として、31の訳書と、二つの研究書が出ていることが記されている。

このような、ルイスの多方面にわたる広い影響力の秘密はどこにあるのか、また、彼の広がりをもった多様な著作にあらわれている彼の中心思想をどのようにとらえるべきか、そして、きわめて合理主義者であり、むしろキリスト教に反対していたルイスが、32歳においてイエスを神の子と信じるに至った回心の経験はどのように理解すべきか、また、58歳まで独身を保っていたルイスが、子供の2人いる、しかも回復の見込のない癌を患っていたアメリカ婦人と病床で結婚式をあげた動機は何であったか、さらには、『キリスト教の精髓』や『四つの愛』などの神学的著作は、ナルニア物語やSF三部作などの作品とルイスの思想においてどうつながっているのか、などなど、ルイスについての問いはつきない。

多年にわたってルイスの研究に携ってきた柳生直行氏の『お伽の国の神学』はこのような問いにこたえるにふさわしい書物である。同氏は、すでにルイスの書物の数冊を訳出し、その思想に関心をもっておられたが、1982年には、ルイスのゆかりの地を巡礼のようなおもいで親しく歴訪し、その生涯をたどりながら、ルイス像を刻んでいった。もともと著者は東京文理科大学に在学中ミルトンについての論文を書くつもりで、オックスフォードのティリアード教授の『ミルトン』を読んでいたところ、このすぐれたミルトン研究家に公開質問状をたたきつけた若い生意気な学者のあることをきいた。それがC. S. ルイスであった。ティリアー

ドールイス論争はのちに出版され、柳生氏はそれを戦後に入手し、それに感銘し、しだいにルイスにひかれるようになったという。してみると、40年をこえるルイスへの関心が本書に結集されたとみることが出来る。多方面にわたるルイスの思想をわかり易く解明した書物となっている。本書を通してルイスの生涯を辿りながら、その思想の背景を知り、その全体像をつかむことが出来ると思う。

本書は、はしがきののち、『悪魔の手紙』を扱った第一章「大学教授対悪魔」につづいて第二章において「ルイスの生涯」を省みる。彼の思想的遍歴、とくに棄教ののちに回心の旅をたどったことが記されている。ルイスの少年時代の記憶のなかで、「或る朝、兄が自分で作った箱庭を子供部屋に持ち込んできた」という思い出が、彼に少なからぬ感動を与え、それは、ミルトンがエデンの園について語った<常軌を逸した仕合わせ>という表現にも近い、何かに対する渴望に結びついた情動であったことを指摘している(50頁)。これは、のちのルイスのナルニア国物語や「歓び」の思想につながる大切な原体験であるように思った。

第三章の標題となっている『天路逆程』(*The Pilgrim's Regress*, 1933)は彼の著作のなかでも最も古いものの一つで、パニヤンの天路歷程にヒントを得た作品で、その副題に<キリスト教と理性とロマンティズムに対するアレゴリカルな擁護>とあるように、回心間もないルイス自身の思想的遍歴をアレゴリーの形で語っている。

P. T. フォーサイスは、芸術の手法に神話的手法とアレゴリー(比喩)的な手法を分けて、同じ19世紀の英国の画家でもB. ジョーンズ(Burne Jones)は神話的で、G. ワッツ(George F. Watt)はアレゴリー的であるとし、神話的なものは、現代の作家の考えを古い型に見出そうとするものであるのに対して、アレゴリー的な手法は、作家の考えを、独創的な形によってあらわそうとするもので、そこには独自の創造性のあることを指摘している(P. T. Forsyth, *Religion in Recent Art*, 1905, p.99)。この点からいうとルイスは独創性をもったアレゴリカルな作家であり、それ故に預言者的な性格をもっていた思想家であったといえよう。ルイスが民衆の中に親しまれていた神話やストーリーにヒントを得て、それらの中に自分の思想を適応させるのではなく、それらを変形して新しいアレゴリカルな物語をつくってユニークなメッセージを現代人に語りかけているのである。ルイスのポピュラリティの秘密の一つがこころあたりにあるのではないかと思う。本來說教ということは、イエスが譬話を通して真理を語ったようにアレゴリカルな側面をもつものと思う。聖書にてらして把握した福音を現代人に理解されるように伝達するのが説教の課題であるとする、説

教に関して素人であるルイスは、^{しろうと} 玄人の説教者顔まけの説教者であるということになる。

たしかに一人の説教者がポピュラーであるということには三つの危険性が伴っている。(一)福音が水増しされて、きき心地のよい文化談義になったり、(二)あるいは、社会的な煩いや責任から人びとをのがれさせて、お伽の国のそよ風に人々の耳を一時的にしびれさせるものがある。(三)またあるときは、説教者の文化的素養や霊的カリスマが中心となって、肝心のキリストがかすんでしまうものもある。

ルイスの場合、第一の危険性、人々にうけいられるために、水増しのキリスト教を語る危険性はほとんどみられない。われわれは、本書の第四章、「生一本のキリスト教」において、いかにルイスが、キリスト教の真髄を、おおいをかぶせたり、割引することなく、ストレートに語っているかを知ることが出来る。もともと、この章のタイトルである、「生一本のキリスト教」は『キリスト教の精髄』(*Mere Christianity*, 1952)という書物からとられている。著者は、「純粋な、混ぜもののない、絶対的な、完全な、(酒で言えば)水割りでない、生一本の」という意味である。ルイスは水割りのキリスト教を好まない。彼が本書で説こうとするのは生一本の、ストレートのキリスト教なのである(109頁)と説明している。ルイスは伝統的なキリスト教——天地創造、人類の墮落、イエス・キリストの受肉、十字架による贖罪、肉体の復活、奇跡、再臨、裁き、全自然の終末的あがない、天使、悪魔、天国、地獄を信ずるキリスト教を水増ししないで説いている。なかでも、人間の普遍的罪(とりわけ自己高慢心と自我、124頁以下)、道徳的教師ではなくイエスを神の子とするキリスト論(244頁以下)そして、神の恵みを「全存在のリズム」に見出して生きる歓びの神学(著者はそこから『お伽の国の神学』という本書のテーマをとっている。215頁)などが支柱となっている。

ポピュラーな説教者の陥りやすい第二のおとし穴は、1時間にもせよ彼の世のしあわせにつかせることによって、人びとをしてこの世のわずらいや社会的責任から逃避させていないかという問いである。マルクスが、宗教は涙の谷の蔭であり、阿片であるといったのは、現世の課題から逃避的な宗教現象を批判的にあらわしたものである。また、ラテンアメリカでいちじるしく発展しているペンテコステ派の教会の分析をした研究が『避難所としての宗教』(*Religion as Haven*)という題をつけて出版されているのもその一例である。

ルイスの場合はどうであろうか。たしかに、ルイスは、国家論とか、平和論というような章を設けて倫理学を展開していない。しかし、本書の随所にあらわれているルイスのこの世に対する姿勢は、この世におい

ては、個人的にも、社会的にも、善と悪とのたたかいにキリスト者は、めざめてそれに前進的に参与するという姿勢である。ルイスは個人の痛み（202頁）や悲しみ（169頁）、そして誘惑（318頁）などの課題を扱い、ナルニアの国の物語（第10章）でも、SF 三部作の「ランサム博士の冒険」（第11章）でも、善と悪との戦いが彼の社会観、宇宙思想の根底にあることを明確にしている。ルイスは、別に倫理的教訓を説くために SF を書いているのではない。ルイスによると、SF には、通俗スパイ・恋愛もの、諷刺・予言的なもの、エンジニアもの、ダンテの「地獄篇」あるいはアリス的なもの、終末的なもの、それに幻想的ないし神話的なものの6種類があり、自分の作品は最後のものに属するとしている。彼は倫理的教訓を目的にしてナルニア物語や SF 小説を書いている。彼の中に与えられたイメージをイマジネーション（想像性）をもって展開させている。しかし、その根底には、現代人への辛らつな批判、とくに現代の科学文明に対する批判を人びとはくみとってゆくのである。すべてが合理的に画一化されている中に独自のイメージを展開しているルイスの独創性を評価するむきもあるが、それとともにわたしは、科学技術によって人間が宇宙や死やそして生命をも支配しようとする科学的合理主義に対する辛辣な批判が全体の枠組みにあることを覚える。本書の著者も、『沈黙の惑星を離れて』（*Out of the Silent Planet*, 1938）や『金星への旅』（*Perelandra*, 1943）などの SF 作品にやや長すぎる議論や手間のかかった環境描写が多いことを指摘しつつも、悪の代表として科学者ウェストンの人間中心の思考はやがて、<操り死体、お化け、非人間（the un-man）>となることを指摘している（310頁）。さらに、SF 三部作のもう一つの作品『かの忌わしき砦』（*The Hideous Strength*, 1945）においては「NICE（国立総合実験研究所）」を舞台として、そこにおいて現代科学の悪用の問題を論及している。「生化学的条件反射と脳の直接操作」がなされ、人間による人間の生命の支配・操作の危険性をルイスは提起している。これらの一連の SF 作品は、いまから40年ほど前のものであることを思うとき、ルイスがいかに早く今日の問題を先取りしていたかということがわかる。ルイスは科学的精神を否定したり、合理性を放棄して感情的に走った人ではなかった。むしろ、彼は理性を尊重して合理的論議を好んだ。ルイスが批判したのは、現代の科学技術が巨大な非人格的な組織と結合して、人間の自由と個性、そして生命をさえ抹殺してしまうような傾向であり、それこそ、人間が悪魔の崇拝者となりつつある現実であることを著者は指摘している（315頁）。



▲扉頁の「マーリン」

ポピュラーな説教者の陥りがちな第三の危険性は、彼の文化的素養や霊的な賜物が魅力の中心となり、彼が指示すべきキリストがかすんでしまい、スター・ブリーチャーとしての彼自身が教祖的存在となってしまったことである。ルイスは60冊に及ぶ出版物や宗教的テーマを扱った BBC 放送の講演を通して、多くのファンをもっていた。事実彼のもとには、おびただしいファン・レターが来ていたし、世界の各地には、「C. S. ルイス協会」なるものが結成され、それぞれ機関誌まで発行している。ルイスはたしかにタレント（賜物）をもった説教者であるが、彼は決して、ルイス教の教祖でもなければ、ファンタジーによる調和者でもない。驚くべき該博な知識を歯に衣を着せない明白な分析をしながら、現代人に割引きしないで、生一本のキリスト教を英国人独特のユーモアとウィットをもって証している英文学徒である。

本書の外函と表紙と扉頁には、3枚の挿絵が入っている。「マーリン」、「恐竜」そして「中世騎士」の三つのイメージは、いずれもルイスの精神を象徴している。それらは著者が、夫人とともに、1982年8月にルイス巡礼をしたおりにドッケンフィールドの女流画家ポーリン・ベインズ女史を訪問したおりにおられたものであった。ベインズさんはナルニア物語の挿絵を描いた人である。著者は、「本書にいささかの価値があるとするれば、それはこの三つのイラストによると言っていいただろう」（413頁）と謙虚にいつているが、本書は、それらの挿絵に飾られるふさわしい内容をそなえている。おそらく、欧米の幾多のルイス研究書と比肩しても、全体的にととのったルイス像を描いたものとして評価されると思う。

もし、敢て注文をのべさせていただくとするなら、ルイスと同時代の神学者との対比が今少しなされていたら、その特色がさらに浮び上がったものとなったことと思う。これは、今後の課題でもあろう。

なお、本書の最終頁は384（頁）と印刷されているが本当は438（頁）となるべきものであることを指摘しておきたい。

〔注記〕

※竹中正夫同志社大学教授（当時）ご執筆のこの書評は、1985年に発行の日本基督教学会編『日本の神学』No. 24（P. 112～P. 117）に掲載されたものです。竹中同志社大学名誉教授は2006年にご召天されました。転載をご快諾いただいた竹中先生ご夫人の百合子様はじめ日本基督教学会事務局ご担当者様ならびに発行元の株式会社 教文館様にこの場をお借りして心よりの御礼を申し上げます。

柳生直行著『生一本のキリスト教—お伽の国の倫理学—』紹介

(新教出版社、1987年、265頁)

関東学院大学名誉教授 川村和夫



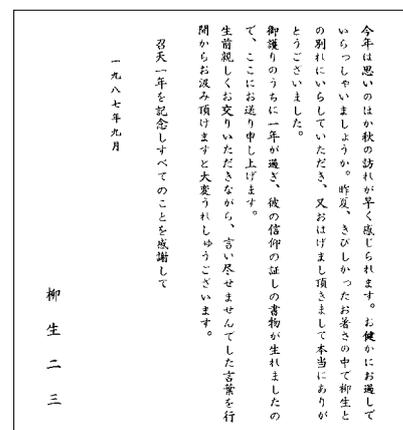
柳生二三夫人の「後記」によれば、この本は、「お伽の国の倫理学」と題して高木幹太氏の編集になる月刊誌「あえーる」に連載されたものをまとめたものであり、従って本書の副題は柳生氏自身が生前自ら選んだ題ということになる。前著(『お伽の国の神学—C・S・ルイスの人と作品』)の場合もそうであったが、この「お伽の国の」という形容詞が大事な意味をもっているように思われる。つまり「倫理学」、「神学」という言葉から連想される学問的で知的なものに対する深い反省がこの言葉には込められている。想像力、直感、靈感というようなものを抜きにした学問的方法によっては、人間や世界の全体は把握することが出来ないのだ、という危機感が柳生氏にはあったようである。ひょっとしたら、現代の倫理学や神学、更には文学研究や哲学、歴史学、自然科学などすべての近代科学に対する批判がこの言葉に秘められているのかも知れない。

この本には聖書の言葉は勿論のこと、柳生氏が感銘をうけた、あるいは興味を引かれた数多くの思想家、文学者、宗教学者、科学者からの言葉が引用されているが、柳生氏はそれらの言葉に対して「お伽の国の倫理学」の立場から共鳴したり、批判したり、問い返したりするのである。たとえば、椎名麟三の「僕はこの復活のイエスの姿を、道に迷った暗夜の旅人の見つけた、小さな灯に対するような切実さで一瞬も自分の前から見逃すまいとつとめている」という言葉を引いたあとで、柳生氏は「<盛者必衰のことわり>——これが世の常識です。が、キリスト教はこれを最後のところで逆転させてしまったのです。キリスト教は逆転の思想です。それは言うなれば、九回裏のツーアウトに出た逆転ホームランみたいなものです。これはファンにとってはこたえられないでしょう。それと同じように、キリスト教は私にとって面白くてやめられないんです。神様はでかいことをなさる。私はでかいことが

大好きなんです」と言い、またルナンの「歴史家にとっては、イエスの生涯は彼の最後のため息で終わる」という言葉に対して「それは逆転ホームランの寸前に家に帰ってしまったようなもので、いやはや何とも気の毒なことです。私は歴史家や聖書学者でなくてほんとうによかったと思っています」と言っているが、こういうところに「お伽の国の」思想家としての柳生氏の面目が躍如としている。こうまで言われてしまうと、キリスト教徒でない私みたいなものでも、そんなに面白いものなら見なきゃ損かもと、多少不安になってくるから不思議である。

柳生氏にとってキリスト教が「面白くてやめられない」というのは本当にその通りだったに違いなく、そのことこそが氏の信仰の深さと純粹さを物語っている。実際、氏にとってキリスト教はお伽噺であったのであり、面白くて仕方がない物語だったのである。人間は何かを信じて生きて行くものであり、柳生氏はキリスト教という物語を、子供がお伽噺を信ずるように、詩人が詩を信ずるように、信じて生きて行ったのである。一体、この世に物語以上に確かなものがあるだろうか。歴史も哲学も科学も、畢竟それを信ずる者にとって、一つの「物語」なのではないか。物語とは絵空事とは違うのであり、それなくしては人が生きていけないものである。柳生氏の言葉を借りれば、「人間というものはそういうふうには造られている」のではないか。

(1988年3月1日付、学校法人関東学院発行
『いんまぬえる』No.43からの転載)



▲故柳生直行先生の告別式参列者宛に召天1年を記念して『生一本のキリスト教』を贈呈された際の送り状

信仰・学問・お伽話～柳生直行先生との対談

元関東学院宗主任・元関東学院大学文学部教授 大島良雄



大島 学院長、あるいは学者としての先生ではなく、むしろ学生にとってのひとりの人生の先輩としての先生のお話をうかがいたいと思います。

はじめにお父様の事からうかがいますが、鉄道省にお勤めになっていて、信仰に入られた後、救世軍に関係されたのでしょうか。

柳生 いや、救世軍ではなくて、ホーリネス教会です。親父が鉄道省に勤めていた若い頃たぶん21歳の頃だったと思いますが、神田の街でホーリネスの路傍説教を聞いたらしいのですね。そして感動を受けてクリスチャンになった。それからホーリネスの聖書学院に多少通ったのでしょうか。もともと非常に真面目な人間でしたから、かなり極端な激しい信仰を持つようになったようです。

後の話になりますが、遊びや無駄づかいというような事は絶対にしない人でした。高給取りではなかったけれど、儉約家でしたからかなり貯金が出来たようです。当時の金で1,000円、2,000円というぐあいでですね。ところが、それをパッパッと教会へ献金しちゃうんです。昭和のはじめの事ですが私の茅ヶ崎の家で3畳間を建増した事がありました、その費用は90円でした。そういう時に1,000円、2,000円と教会に献金してしまうので母親はかなり苦しんだ様ですけど、そんな風に信仰一筋に生きた人ですね。この父の影響は私にとってかなり強いものだったと思います。

大島 普通その様なきびしい信仰を持った人の家庭では、子供たちは逆の方向に行く事も多い様ですが、先生の場合はお父様の態度に感激されたり共鳴されたりしたところがあったのでしょうか。

柳生 その辺は難しいところでして、今の話では親父がえらく立派に聞こえるかも知れませんが、やはり欠点の多い人でした。つまり精神的、信仰的につよいと、他者に対してもきびしくなりがちで、人を許さないという欠点におちいりやすい、そういう面が私の父にもあった様です。

私が信仰を持った、或は持ちつづけたのは、かならずしも親父の影響ばかりとは言えないと思うのですが、先達て母親から聞いたんだけれど、私が幼かった頃、肩の骨がはずれたか、何かしたらしいのです。そしたら親父が私を抱いて（私は保土ヶ谷で生れたんですが）、山の上に行って祈り、やがて帰って来て、母親に、「なおったよ」、と言ったというんです。それからこれも最近母から聞いた話なんですが、（そしてこんな事を言っちゃ大変恥ずかしいんですが）、親父が母に、私の事を、「この子は我が家のサムエルだよ」と、言ったというのです。ですから親父も母親も、そういう意味で私に信仰的に期待するところが多かったのではないかと、いう気はします。

私は実は三男坊でして、兄貴が二人いるんですが、兄貴達ちゃんなくて私に後継ぎみたいなものを期待していたかも知れません。事実私が後継ぎ、つまり牧会をしている訳ですが…。

大島 先生の弟さんの柳生 望先生（立教女学院短大教授文学博士）も立派な信仰者ですし、妹さんは臨終のときに立派な証しをなさった様にお聞きしていますが、それぞれお父様の信仰を受けついでおられるんですね。

柳生 われわれ兄弟は一向に立派な事はないけれども、今、妹の話が出ましたので、ここでもういちど証しをさせていただきたいと思います。私の妹は、昭和14年3月、小学校を卒えて女学校に入る直前の3月25日に肺炎で死んだのですが、その臨終の時の事をいまでも忘れる事が出来ません。彼女は母にちゃんと挨拶をして、「お迎えが来ました。私はこれからお先に天国に参ります。お母様もあとから来て下さい」といって、そして呼吸するたびに「さよなら、さよなら」と100回も200回も言って最後に息を引き取ったのです。その時、私は、本当に天国から天使たちが馬車でお迎

えに来たようなそんな感じを受けたのです。

このことをいつか短大の修養会で話したら、女子学生たちは「柳生先生はあんな事を言ったけど天使が馬車で迎えに来るなんてそんなことないわよね」と言ったそうですが、まあはたから見ればそうでしょう、しかし、私は本気でそう信じているんです。今でもそうです。

それから親父が10年程前に死んだ時も、私は天国を見る思いがしました。と言うのは、私と私の姪が二人でその場に居合せたんですが、そして讚美歌を歌って送ってやったのだけど、父が息を引き取った時のことです。それまでは老人（83歳）ですし、やつれていたし、まあいわば、ひどい顔をしていた訳ですね。

ところが、呼吸が止まった瞬間に、それがおだやかな微笑をうかべた若くて美しい顔に変わったのです。私の家の古いアルバムに父が40歳ぐらいだったころの変色した、しかしにこやかな写真があるのですが、その写真にそっくりの顔になった、つまり40年ばかり若返ったのです。それは私にとって本当に大きな驚きでした。

その時も私は誰かが、先に天国へ行った妹か天使かが迎えに来て、それで父はにっこりしたんじゃないかと感じました。それで私は一つの願いを持っているんです。それは、私が死んだ時、まわりの者に、ああ天国はあるんだと思わせたい、ということ。ちょっとキザですけどね。

大島 そうですね、信仰というのは根底においてそういうことがないと知的なもの道徳的なもので終わってしまうのです。そして理性とか合理性を超えた人間の最も深いところでかかわっているのが信仰であることを忘れることがあるのですね。

柳生 そうですね。今はご承知の様に理性の時代、科学の時代で……今始まった話ではないけれども、たとえば、ヘーゲルは聖書のキリスト教は、庶民の宗教としては結構だが、真理が表象的に物語の形式で表現されている点が十分でない。本当の宗教は表象や物語性を捨象した概念による思弁の哲学でなければならぬ、ということで、(1) 東洋の諸自然宗教、(2) ユダヤ教とギリシャの宗教、(3) 啓示宗教なるキリスト教の上に、(4) 絶対的哲学の立場をおき、「学（哲学）は絶対精神の概念的認識である」と言っていますね。私はこういう考え方は間違っていると思うんです。

オックスフォードとケンブリッジの教授であったC・S・ルイスは、「キリストの物語は、良心および知性に対してのみならず、またわれわれの内なる子供、詩人、原始的なるものに対しても向けられているのだ」と言っていますが、私もそう思います。表象のない概念だけの宗教なんていうのは、イエスの譬を抜きにした福音書みたいなもので、そんなものはキリスト教でもなんでもありません。ヘーゲルが説いているの

は頭だけの宗教、いや哲学で、人を救う力はありません。

大島 私もよくわからないのですが、ウィリアム・ブレイクの様な詩人が好きなのですね。自分にはないのですが、何か、幻とか幻想とか超越的なものにかかわっているところが。やっぱりそう言ったところが宗教にあるのですね。

柳生 つまり哲学者たちは、例えば、「天にましますわれらの父よ」という言い方はいかんという訳ですよ。「天とはどこにあるのか、父とは何んなのか」、その天とか父とかいうイメージは幼稚で原始的だという訳です。ところが哲学者たちは神と言ったとき、全然イメージを持たないかと言うと、人間というものはイメージを、持たざるを得ないんですね。何か持っている訳です。全然概念だけというわけにはいかないものなのです。ルイスの面白いところは、「天の神はひげを生やしたおじいさん」と考えたために、地獄におとされた人間は一人もいない、と言うんです。ひげを生やしたおじいさんを思いうかべながら——その右にはイエス様が坐っている——お祈りしてよろしい、と言うのです。なぜなら、「神とは何か」という問に対して、「天にいます父である」と教えたのは、ほかならぬ神ご自身であるからです。つまり、これは人間がでっち上げた表象ではなくて、神様自身が認めたイメージなのだ、もちろん神と人間との関係はどんなメタファー（隠喩）を用いても表現することはできないが、一ぱんこれに近いのは父と子の関係だ、と神ご自身が言っておられる。だからこれを捨象してはならないという訳です。

大島 折角ルイスの話が出て来たのですが、後ほどもう一度うかがう事にして、お父様の事について更にかがわせて下さい。お父様が鉄道を退職された時、退職金を全部教会に献げてしまわれて、先生は学校に持って行く弁当のおかずがなかったとおっしゃり、その時に親父の信仰が本物だと感じたと言われた事がありました。信仰に生涯を賭ける姿をみられたのですね。

柳生 いわゆる明治人間のバックボーンがあったのでしょうかね。

たとえば神田の伝道集会で話を聞いて回心して、家



▲単立湧泉教会礼拝堂内（2001年8月28日撮影）

に帰って来るとすぐに仏壇を庭にほうり出したという
ことで、それを見て親父の兄が非常に怒ったという
様な話を後で聞かされましたが、そういう激しいと
ころがあったのですね。

はげしいのは欠点でもある訳だけど、純粋な生一本
さというのは、一寸現代のわれわれには真似出来ない
という意味において、やはり感動を受けますね。



▲柳生直行先生著訳書ほか

大島 本音と立前との二面を上手につかいて生きて
いますからねわたしなどは…。

柳生 さっきの鉄道省退職の話ですけど、そのときわ
が家は15歳をかしらに8人の子供がいたのです。父が
鉄道をやめたのはすべてを神にささげて開拓伝道を始
めるためだったのですが、一方また身体をこわしてい
たという事情もあったのです。こんな時に一家の収入
がゼロになるというのは大変なことです。ところが
さっきも申しましたように父は1,000円、2,000円と教
会に献金してしまう訳です。それで私などもあやうく
中学に行かれないという有様でした。母も何回か質屋
に通ったようです。こういうことは、いいかげんな信
仰ではとても出来ないことだろうと思います。

「わたしたちがこうして気楽に暮せるのも、おじい
ちゃんの信仰のおかげだね」と、よく私の母が申しま
すが、あるいはそうかも知れません。父は昭和7年に
ペンテコステ的な聖霊の降臨を体験したのです。だか
ら彼の教えはつねに「聖霊を受けよ」ということでし
た。頭でっかちの神学が大きらいでした。この点は私
も似ています。

大島 一番影響をお受けになったのはお父様ですか。

柳生 あまり身近すぎて自分では分りません。今は母
の影響を受けているようです。母は素朴な実といい信
仰を持っているんです。

大島 先生は大阪外語を出られて、東京文理大を出ら
れたのですが、専攻されたのは中世の英文学だったの
ですか。

柳生 中世という事はありません。大阪外語の時代は
専門学校ですから、むしろ語学が中心で英文学も多少
やったという程度でした。文理大に入って卒業論文は
ミルトンをやるつもりでした。ところが、私の卒業年
度は昭和20年の9月でしてね、面白い事にこの年だけ

卒論がなかったのです。もちろん戦争のためです。

大島 戦争が終った直後ですね。

柳生 8月15日に終って9月に卒業しました。戦時中
は赤羽の被服廠に勤労奉仕に行っていました。主任教
授は福原麟太郎先生で、やっぱり影響を受けましたね。

大島 その時分は論文は書かれなかったけれども、ミ
ルトンの研究をなさっていたのですか。

柳生 纏めるまでには至らなかったけれども、少くと
もやる気でいた訳です。キリスト教文学に興味があっ
たという事でしょうね。

大島 それから後にシェイクスピアに入られたのです
か。

柳生 入ったというか、シェイクスピアは英文学をや
る人はみんなやらなくてはならないものですから、や
らざるを得なかったと言うべきでしょう。

大島 今のご専攻というのは。

柳生 アンケートなどには17世紀英文学なんて書いて
いますが……これまたC・S・ルイスの影響が大き
くて、17世紀、16世紀あたりに非常に興味を感じていま
す。逆に言うと現代のものは読んで面白くないという
事です。なぜかと言うと、私は現代に生きていますか
ら現代の作家や詩人の書くことは読む前から分ってし
まう訳です。同じ空気を吸ってますから。だが17世紀
とか、16世紀とか、更に中世となりますと全然空気が
違う訳ですね、だから面白いのです。

大島 C・S・ルイスに関心を持たれたのは、ルイス
の研究領域と、先生の研究されている時代とか領域が
たまたま同じだったからですか。或はまた、ルイスは
文学だけでなく宗教と童話の世界に関心を持ちその方
面の著作があるという事で、その方面から関心を寄せ
られるようになったのですか。

柳生 私はルイスのすべて(人間・学問・信仰・文体)
に惹かれています。ふつうは、アポロジェティクス(護
教論)たとえば『悪魔の手紙』とか、『キリスト教の
精髓』とか言うところから入って行くのですが、私の
場合は今申しました様に、ミルトンについて卒論を書
くつもりでいましたので——ティリアードという人の
『ミルトン』という研究書を読んでいたので。これは
非常にすぐれたミルトン論でして、たいへん感激し
た訳です、ところがその頃、このティリアード大先生



▲柳生直行先生著訳書ほか

にケチをつけている生意気な若い学者がオックスフォードにいるということを知ったのです。そいつが『ミルトン』の方法についてティリアードに公開質問状を送り、ティリアードがこれに答えるという形で何回か論争が行われたらしいのですが、その生意気な奴がほかならぬC・S・ルイスだったわけです。つまりルイスは私にとって俱に天を戴かざる仇として現われたわけなのです。

さて、右のティリアード・ルイス論争は『パーソナル・ヘレシー』という書物となったオックスフォードから出まして、私はそれを戦後手に入れて読んだのですが、困ったことにルイスの方がスカッとしていてえらく歯切れがいいんですね。一方、ティリアード先生の方はいいことを言っているのだけれども温厚すぎて、英語でいう clincher つまりズバリ急所をつくようなところがないんですね。というような訳でルイスの他の書物を読んで行くにつれ、私の敵だったはずの彼にだんだん惹かれて行った次第です。

彼の『失樂園序説』なんていうのはすばらしい本なのです。それから彼の書いたキリスト教的な本を読むようになって、これまた感心してしまったのです。普通のキリスト教概論、キリスト教入門と違う訳ですよ。読んでいて兎に角面白いんですね。それですっかり、ミイラ盗りがミイラになってしまった訳でして……正直言って、私はルイスに出会った事をわが生涯における最高の祝福の一つだと考えています。というのは、彼の学問と信仰が私の理想と考えているものに大変近いんですね。というよりも、とにかく読んでいて面白いんです。

オックスフォードの学生たちの間に長年語りつがれてきたルイスの言葉にこういうのがあります。「[プラトンの]『饗宴』を読まずに死ぬのはばかげたことだ。それは海で一度も泳いだことがない、ブドウ酒を一度も飲んだことがない、恋愛を一度もしたことがない、というのと同じようなものだ」。この言い方が面白いんですね。こんなふうに言われると、プラトンの本を読まずにはいられないでしょう。ところで私は右の『饗宴』の代りに<ルイスの本>という言葉を入れて読んでいます。つまり「ルイスの本を読まずに死ぬのはばかげたことだ」と。

学問的には言うまでもなく、信仰の面でも実に多くのことを教えられました。その一つは、宗教は神話だが、キリスト教は事実になった神話、神話が事実になったものだ、ということ。これはG・K・チェスタトンも言っていることですが、この考え方は私にとって大きな救いでした。それからもう一つ、キリスト教だけが100%正しくて他の宗教は誤っている、というのは間違いで、どんなに低級と思われる宗教にも真理契機がある、ただキリスト教はもっとも成熟したかつ完成された宗教である、という考え方。シモーヌ・ヴェイ

ユがホメロスの中にキリスト教の真理を読み取っているのもこれと同じで、ホーリネスに育った私としては非常に気持が楽になった感じです。

大島 「お伽の国の神学」とか「お伽の国の倫理学」とかを『いんまぬえる』や『あえーる』に連載していらっしゃるの、ルイスの影響が間接的にある訳でしょうか。

柳生 ええ、あると思います。それに今いったチェスタトンの影響も実を申しますと、「お伽の国の倫理学」はチェスタトンの『正統主義』は第四章 The Ethics of Elfland をそのまま盗んできたものなのです。キリスト教は神話が事実になったものですから、またお伽話が事実になったものでもあるわけです。これが私の信念です。たとえば「シンデレラ」において主従関係が逆転しますが、キリスト教とはすぐれて<逆転の思想>なんです。だから面白くてやめられないのです。言うまでもなく、十字架から復活へというのが、その逆転の思想の中心であります。



▲スピーチをされる柳生先生(於・捜真女学校)

ルイスは『ナルニア物語』というお伽話を7冊書いていますが、彼は「お伽話は自分の言いたいことを言うのに最も適した形式だ」ということを言っています。つまり霊的真理・深い人間的真理を語るにはファンタジーの方がリアリズムよりもよいという訳ですね。さっきも言ったように、ほんとうの真理は、ただ頭だけではなく、われわれの内にある原始人的なもの、詩人的なもの、子供のなものを満足させるのでなければならない。そういう意味で、すぐれた童話はお固い神学書や哲学書よりもはるかに深い真理を語っているように思います。

それからもう一つ、今お話したことからお分りのように、私はお伽の国の神学によって現代に挑戦しているつもりなのです。現代は非常に理性的で、科学的で、概念的な時代ですね。お伽話の入る余地はないわけですよ。そういう現代の思想傾向に対して、お伽の国の神学こそ本物なのだということを私は言っているつもりなのです。その根拠は、「これらの事を知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわして下さいました」——これなのです。

大島 おそらく先生が初めてですね、お伽の国の神学なんて題で物を書いているのは……それを子供にはではなく大人に向けて書いておられるのは。

柳生 そうかも知れません。大人に聞いてもらいたいのです。

大島 文学というのは、どう言うものなのですか。そして特に英文学に興味をお持ちになったのは。

柳生 まず素朴な話ですが、中学時代出来る学科は一つもなかったんです。どうやらいけそうだとするのが英語だけだったのです。

そう言う消極的な理由から、外国語学校(今の外大)に入って英語、英文学をやった訳です。独、仏語でなくて、英語をやったというのは、阪神や広島でなくて、巨人だということと同じで非常にありふれたことなんです。

文学とは言葉によって人に感動を与えるものでしょうね。お伽話にかかわってくるのですが、最近私は文学の方が神学より哲学より一層人間の真実を語ってくれる様な気がいたします。たとえば、トマス・アクィナスの『神学大全』よりも、ダンテの『神曲』の方が感動するんですね。また現代の神学者の書いた本よりもホメロスの『イリヤード』とか『オデュッセイア』の方が心を動かされるのです。感動というのは何かと言うと、ただ面白いから感動するのじゃない訳で——そう言う感覚的な面も文学は持っているけれど——私が感動というのは、やっぱり魂の感動なんですね。さっき言った様に頭だけでなしに、全身全霊がふるえてくるような、そう言う力を持っているのは哲学や神学でなくて文学ではないかという感じがしますね。そう言う力を持つものは、やっぱり、私にとっては、古典が多いですね。現代のリアリズムを読んでもそう言う経験が余りないのです。それで現代のものを余り読まないという事になっちゃう訳ですけどね。

プラトンとかダンテとか、ああいうものには非常に心を動かされます。これは私の信念なんだけど、昔の人の方が人間というものをよく知っていたと思うのですね。今の様な理性主義の時代になると人間の一部しか分ってなくて、人間の全体を理解することが出来なくなるのではないかと。これは科学が発達すればする程、そう言う事になるのではないかと思います。

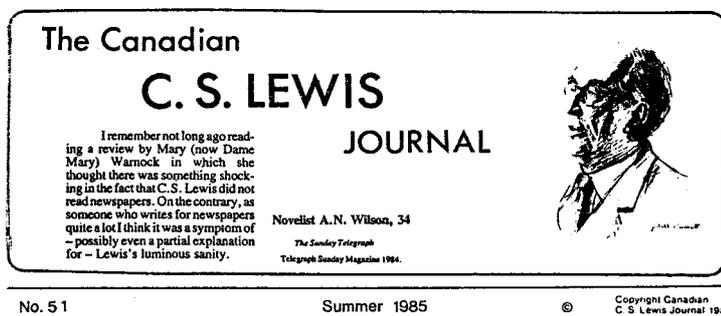
たとえば、ノーベル賞受賞者ジャック・モノーという生物学者がおりますが、彼の書いた『偶然と必然』という本なんかを見ますと、「バクテリアから人間に至るまで」その構成要素はタンパク質とアミノ酸であり、アミノ酸の種類は20であるとかくり返し言っています。つまりこの学者は人間をみる時、つまりこの学者は人間をみる時、いつもバクテリアから見ている訳です。バクテリアと人間とは本質的に同じだという見方をしている訳です。それをルイスは下から物を見ると言うのですが私はそれを『いんまぬえる』に書いたことがあります——そう言う一面的な見方しか出来なくなってしまうのです。上から物を見る事を拒否する訳です。何故なら不確実だから。要するに科学というものは確実なものから不確実なものへと進むわけですからいつも下から物を見るしかなくなってしまうのですね。これが現代の一般的傾向じゃないかと思うのです。

それに対抗して私はお伽話をもって来る訳ですが、これは上から人間に近づくということなんです。

という訳で、私は生命のあるかぎりお伽の国の神学・倫理学を語りつづけるでしょう。それは無意味なことではないと確信しているからです。やがて Paradigm shift が、次に逆転劇が起ることを信じているからです。ついには幼な子が知者や賢者に勝つのです。

(1983年6月20日付、関東学院大学チャプレン会
発行『告知板』No.157からの転載)

--the leading story in the Winter Journal is about half a dozen pages on Nao's new book, CSL The Man and His Works. It is the first overall study of Lewis in Japanese; and there is only one other--to the best of my knowledge--overall study of Lewis in non-English, and it is by Dr Gisbert Kranz, which I plan to report on as soon as I can. (Fortunately Nick van der Gaag is fluent in German, & a neighbor). Germany is a country of--at least ostensibly--millions of Christians, for centuries and centuries. Japan, on the contrary--of its 100,000,000--contains only about ... one million Christians. Where is the overall work about CSL from a French or an Italian scholar, both nations of millions of Christians for centuries and centuries.* None! But this fine work on CSL comes from Japan, a nation--I repeat--of only one million Christians. Hence the significance of Nao's book. Kay chose the heading for me: two words: JAPAN TRIUMPHS. A perfect heading, I think.



▲The Canadian C. S. Lewis Journal の主幹スティーヴン・スコフィールド氏から柳生直行先生はじめ全9名の同志宛の書簡(1985年4月4日付)の中のP.4に掲載されている同ジャーナルのヘッダー部分(両書簡は柳生二三氏所蔵)

◀同スコフィールド主幹から同9名宛の書簡(1984年11月27日付)の中で、同ジャーナルの冬季号からの記事が引用紹介されている。上掲したものはその一部であり、柳生直行著『お伽の国の神学(CSL The Man and His Works)』の存在意義は、クリスチャン人口の少ない日本から出版されたことにある、と記述されている。「Nao」は柳生直行先生の愛称。

柳生先生の思い出——故柳生直行先生の学風

関東学院大学名誉教授 川村和夫



私が関東学院大学に就任した頃（昭和41年）、柳生先生は45、6歳だったはずで、今の私より7、8歳若かったはずですが、すでに先生は教養部長（当時はまだ文学部はなかった）をつとめておられ、かなりお忙しかったにもかかわらず、月に一度は英語の先生方を集めて、土曜の午後、金沢八景の真鶴会館の一室を借りて、研究会を開いておられました。原則としてここでは新しい英米の小説について英語で論じ合うことになっていて、慣れないうちは大変でした。たいていアメリカ人の宣教師（今文学部の教授をしておられるエリオット先生も当時は宣教師だった）が一人か二人ぐらい入っていたので、英語を使うことになったのだと思いますが、そればかりではなく、私のような若い先生たち（その頃はまだまだみんな若かった）の刺激に少しでもなればという老婆心もあつたに違いありません。私も勤めて間もなく、Virginia Woolfの*To the Lighthouse*（『灯台へ』）について英語のペーパーを読んで、エリオット氏の質問にしどろもどろの英語で答えたのを覚えています。

そのように先生は学者である前に、学生ばかりでなく同僚に対しても、良き教師であったように思われます。というよりは、先生にとって学問というものは、生きること（先生の場合は信仰も含めて）と切り離しては存在せず、学問のための学問、研究のための研究といったものにはあまり興味がなかったように見受けられました。そのことは、柳生先生の業績目録にも良く現れていて、「T. S. エリオットの宗教思想」、「ヘミングウェイの倫理」、「失楽園と現代」、「An Aspect of Poe's Personality」というような題が示すように、先生にとって文学研究とは常に思想、宗教、倫理、し

かも「現代」との関係におけるそれらの意味、を探求することであったのです。従って、柳生先生の日から見れば、最近はやりの‘Deconstruction’とか、文学作品のテキストを作者の生き方から切り離して“écriture”（「書く」行為そのもの）として考えるというような傾向に対しては批判的であったように思います。

亡くなられる2、3年前、柳生先生は「僕は今までT. S. エリオットとか、ヘミングウェイとか、D. H. ローレンスとか、いろいろな作家を読んだり研究したりしてきたけど、なかなかこれぞと思う作家に出くわさなかった。最近になってようやく、C. S. ルイスこそが僕にとって一番大事な作家であることが分かってきた」という意味のことをおっしゃっておられました。また「C. S. ルイスの真価が認められるようになれば、そのうちT. S. エリオットなんかは吹き飛ばされてしまうのではないか」と真剣な顔つきで言われたこともありました。ルイスについては早くから目をつけられ、多くの作品を先生独特の名文で翻訳されてきたわけですが、本格的に取り組むまでには20年以上の歳月を要したことになります。その結果生まれたのが『C. S. ルイス、人と作品—お伽の国の神学』でした。ここに柳生先生の学問と思想とが融け合って実を結んだのです。（1987. 6. 1）

以上の文章を書いたのが今から24年前、私がまだ54歳の時でした。78歳になった今、この文章を読んでも何か不思議な気がします。ひとつには、よく今まで生きてきたなあという個人的な思いですが、もうひとつは関東学院大学と今の私との因果関係です。関東学院に勤めることが出来たのは柳生先生のお蔭です。また関東学院に勤めることが出来たお蔭で、ウィリアム・エリオットという人を知り、そのエリオットと柳生先生との協力のもとで関東ポエトリ・センターという、当時の日本ばかりではなく、今の日本でもめずらしい詩人と一般読者との交流の場が誕生しました。この関東ポエトリ・センターでの活動を通して私は詩のことばを本当の意味で味わうことを知り、そのことが現在の私の毎日を支えてくれています。その関東ポエトリ・センターが毎年おこなっていた夏季セミナー（最初は大磯、のちに葉山で）にも柳生先生は顔を出してください、熱心に応援して下さいました。

（2011. 7. 28）

TWO CASES FOR CHRISTIANITY

William I. Elliott

Does like attract like? Clive Staples Lewis and Naoyuki Yagyu saw eye to eye. In the final analysis Lewis explored the route of intellectual Christian commitment and Yagyu-san unashamedly chose the time-honored route of 'blind faith,' so-called. What Lewis would have admired about Yagyu-san's commitment was the unabashedly cheerful leap of faith that did not ultimately hinge on intellectual justification and what Yagyu-san admired about Lewis's unashamed commitment was the rational case that Lewis built for faith. There are at least those two routes to the same destination of faith.

With Naoyuki — and even more with his scholarly and ordained younger brother Nozomu — faith was a frequent topic of conversation. It was not surprising that Naoyuki gravitated toward C.S. Lewis's various writings, for in numerous essays Lewis explored the meaning and relevance of, and the case for, Christian faith. Bear in mind, too, his outstanding literary criticism. Thus when Naoyuki was in the process of writing his appraisal of the work and career of Lewis it occurred to me that Lewis would be pleased to know of Naoyuki's work and, by the same token, Naoyuki would be pleased to know that Lewis was aware of his — Naoyuki's — work in progress. By way of wanting to surprise Naoyuki I wrote to Lewis and enquired whether he would be able to compose a brief foreword for Naoyuki's book. He replied in short order that he was then hospitalized — with a broken leg? My memory fails me — and was thus indisposed and not able to do that. But I showed his letter to Naoyuki and his eyes shone. He felt honored that Lewis knew of his work, and so honored that he included a photo-copy of Lewis's letter in the book when it was finally published.

In speaking with Tatsuya Senuma-san in June 2011, I was surprised, as was Senuma-san, to figure out that Yagyu-san died about a quarter of a century ago. I had thought it must have been ten or twelve years ago. The miscalculation occurred because very few days have passed in these years when Naoyuki had not popped into my mind. He is, that is, in some sense, still with me.

When I last spoke with him in the hospital in Tokyo disease and medicine had rendered him exhausted. His beloved wife was there, barely able to hold back her tears. Here, I thought, are a man and a woman who have 'fought the good fight.' Following Naoyuki's transition, I tried to find words for the deeper sense of things. Poor though they be, they are in the elegy I wrote.

(Professor Emeritus, Kanto Gakuin University)

IN MEMORIAM NAOYUKI YAGYU

(1920—1986)

William I. Elliott

The last leaf has fallen. We watched it zig-zagging to the forest floor, spiraling down onto the rich anonymity of all of those who have fallen before; and now every tree is bare, their bones black with barrenness. Not one leaf remains and no bird sings. Listen! The sound of nothing.

Horatio was lost in such a woods;
stood dumb in the leafless dumb woods and said,
“Now cracks a noble heart. Good night, sweet prince,
And flights of angels sing thee to thy rest!”
Hamlet floated down to the forest bed
and left Horatio bereft, bare as the trees
above, through which the sky looked down on him.

It was a dismal day in Elsinore;
a dismal day for Kanto Gakuin,
the trees as leafless as the birds are still.
Does Nature fall silent when princes die?
Birds do. And people. Grievers do not sing
but only stand numb, stunned in the dumb darkness
of their hearts, desolate in a desolate woods.

But Yagyu-san would say, ‘Don’t be too quick
to judge the woods by the silence of the birds
or by its empty trees and dead leaves. God
is not skin-deep, nor silence merely silence,
but a prelude to music. Look within!
New nubs of life have now begun to bulge,
and green in motion budge pall mall toward spring.’

By what he’d say we are not much relieved;
not much, but looking at the trees anew,
imagine them re-leaved, the whole deep lush
forest green, green with leaves and cockatoos.
We imagine. In the barren real woods
now, it is enough to know that buds nudge;
enough to catch the flutter of a small bird.

(Professor Emeritus, Kanto Gakuin University)

(This elegiac poem for Dr. Naoyuki Yagyu is reprinted from the *Bulletin* (No.50, 1987) of the Society of Humanities of Kanto Gakuin University.)

充実した時間～柳生直行師との出会い～

インマヌエル鶴瀬キリスト教会 牧師 葛田善毅

「このキリストは、われわれをあらゆる邪悪から救い出して、神の聖き民となし、かつ善を行うに熱心な者とするために、御自身の生命をおさげになったのである。… [中略] だれにも馬鹿にされてはならぬ。」(テトス書 2章14、15節) 柳生直行師『新約聖書』

今から、20年以上も前にさかのぼる、1986年4月のこと。関東学院大学文学部英米文学科に入学を許された私は、入学式の第一声で、そのジャイアント(巨人)にKO(ノックアウト)されることになる。その時の様子は今もはっきりと覚えてはいるものの詳しく書いていると、それだけで紙面がなくなってしまうので、私にとって最初で最期の授業となった4月の英米文学概論の様子と、以前書かなかったことを記してみたい。

それは、授業の中で私どもに英語の学び方を教えてくださった時のこと。先生は、留学中に、コインを入れて時間に迫られつつ集中してタイピングされた時のことを話された。同じく、書齋に籠り、自分では思っても見ない程に時間が経過してしまった時のことを、「充実した時間とはそういうものだ!」という例として話してくださったのである。人生を歩んでゆく中で、先生のこの「充実した時間」の例話を思い起こす。長崎のミッション・スクールの中・高校生に話をする機会が与えられた時には、しばしば、引用させていただいた。「よく生きることとは、よく死ぬこと。」といった内容の学内での機関紙、『いんまぬえる』誌に載ったエッセイも忘れることはできない。

私は、師と出会い、その年の9月に先生は召天されたが、『告知板』、『いんまぬえる』のバックナンバー、『生一本のキリスト教』(新教出版社)、『新約聖書』柳生直行師、(新教出版社)を通して更に先生の偉業を知ることとなり、今もなお、否、今だからこそ改めて、先生の語られたことを再読し、嘸み締めてゆきたい思いに駆られるのである。

卒業してある日のこと、横浜駅で、柳生直行師の奥様の二三様に再会をした。それは、今考えても不思議な出会いであった。瀬沼達也氏(当時、国際センター運営課)には、在学中は、大変お世話になっていたのですが、追悼集を出すにあたってお声をかけていただき、卒業直前学生数人と追悼集の完成のご報告も兼ねて、先生のお宅にお届けする時、私もそのお仲間に加えていただいた。(余談ではあるが、その時、鰻をごちそうになり、腹に染み入る美味だったことは若い頃の思い出である。)それで、奥様のお顔を忘れる筈も

無く、横浜駅のあの雑踏の中で、お声をおかけした。奥様はお茶に誘ってくださり、柳生直行師のお好きな讃美歌に話が及んだ。「イエスは私のすべてなれば」という折り返しの讃美歌で、英詩の翻訳、殊に讃美歌の翻訳を志して学びつつあったので、早速、歌詞は異なるものの、その讃美歌の載っている『インマヌエル讃美歌』をお送りした。その後、年賀状などをやり取りしつつ、私共の結婚式のスピーチをお引き受け頂いたり、本当に節目節目で、今もなおご厚情に与っている果報者である。

その交わりの中でわかって来たことは、柳生直行師のお父様と、私の祖父(葛田二雄 1906～1971)が、戦前、同じホーリネス系の教会の牧師であった故に、知己があったと思われること。横浜の海岸教会に曾祖父(葛田顯理 1886[明9]11.8～1945[昭20]2.26)の姉の寄贈のピアノがあったことなど、神様のお導きというか摂理というか、繋がりに感謝した次第である。

今、先生を想う時に、なぜか(大正文語訳)『聖書』にたどり着く。先生は、ご自身の訳された『新約聖書』のあとがきの中でも、大正文語訳に勝るとも劣らない格調の高い訳語を目指しておられたことがわかり、関東学院大学に寄贈された先生の個人蔵書中にも、文語訳聖書が収められていたことから、ギリシャ語から翻訳なさった先生ですが、日本語訳としての文語訳に敬意と愛着をもっておられたと拝察することです。

中学3年まで、私どもの通っていた教会学校では文語訳聖書が用いられていたこと。牧師であった父(葛田眞實 1932～1996)も文語訳を愛用していたこと。翻訳などもしていた父が、時々参考に柳生直行師の新約聖書にも目を通していたことが、懐かしく思い起こされます。

最後に、聖書を読むには、とっつきにくいとおっしゃる方々には、柳生直行師が、翻訳された『天の都をさして』～天路歷程(てんろれきてい)の少年版～[絵本]をぜひ、ご一読して戴きたいと思います。聖書の次に英国で愛されたジョン・バニヤンの物語は、聖書の言わんとするところの要約として、聖書に代わることは出来ませんが、今日の私どもに勇気と希望を与えてくれることでしょう。特に、ジャイアント・デスペア(絶望)に負けそうな私どもに、もう一度、目を覚まして立ち上がり、戦いを仕掛けるようにと励まされるに違いありません。(2011年9月記)

(関東学院大学文学部英米文学科卒業生)

柳生直行 — (1920~1986)

「建学の精神」の説き明かし

柳生は1978年に学校法人関東学院学院長に選任されている。この役職の責任上、関東学院の創立記念日、併設各学校の入学式・卒業式において式辞を述べる機会が多くなった。その式辞のほとんどすべてが、関東学院の『いんまぬえる』または大学の『告知板』に再録されている。柳生の逝去後、これらのうちの一部がまとめられ、1988年9月に『おのれを低くする者 柳生直行講話集』が関東学院から発行された。これを手がかりに、柳生がことある毎に語った、独自の関東学院の「建学の精神」の説き明かしに先ず注目したい。

「おのれを低くする者」

この書名と同じタイトル、実はこのタイトルからこの書名が付けられた「おのれを低くする者」の中で、柳生は開口一番こう語りだした。

「関東学院はキリスト教の精神を土台として建てられた学校である。さればこそ職制



▲外面

の第1条にも『本学院はキリスト教の精神を以て建学の精神とする。本学院の職員はよく本学院の精神を体し、その徹底に努めなければならない。』とうたわれているのである。」(関東学院職制は大正8年制定、昭和42年5月1日改正一注)

私立学校の憲法といわれる定款「関東学院寄付行為」を大上段に振り回さずに、教職員に日々適用される職制から引用しているのは興味深い。建学の精神が日常的なことであると言いたいのであろう。しかも建学の精神の担い手は、現場の教職員なのである。

「ここ十年ほどの間、私の心を捕えて放さない聖書の言葉がある。それは、『だれにせよ、おのれを高くする者は低くせられ、おのれを低くする者は高くせられるであろう。』マタイ23：12という一句である。」

関東学院の建学の精神はキリスト教の精神であること、そしてその精神を簡潔にまとめたものが校訓「人になれ、奉仕せよ」であることをまず確認している。しかもこのマタイ23：12がそれを的確に表現していると柳生は言う。

「おのれを低くする者の最高の例は神ご自身である。アウグスティヌスによれば、神は、『高くせられんが

ためにおのれを低くしたもうた』のであった。・・・ここでわれわれは次のイエスの言葉を思い起さずにはいられないだろう。『互いにほまれを受けながら、ただひとりの神からのほまれを求めようとせぬなんじらは、どうして信ずることができようか。』(ヨハネ5：44)」 (『いんまぬえる』1978年7月号)

神をあがめ、そして自分自身を謙虚に「しもべ」とするあり方に徹することが、校訓の意味するところである、と柳生は解釈する。ここで引用した聖書の言葉は、柳生自身が単独で翻訳したものである。これは推敲を加えられて、後に新教出版社から柳生訳『新約聖書』が出版された。

「魂がついてこない」

とても奇妙なタイトルのもとで、ここでも柳生は校訓を説き明かす。

「私たちは生まれたときから『人』であるわけですが、それでは足りないらしく、さらに『人になれ』と申します。」

ここで先ず柳生は「私の信仰の恩師である」というハンナ・スミス(1832~1911)の言葉を引用する。この宗教思想家はアメリカのフィラデルフィアに生まれ、後にイギリスに移り住んだ。彼女は神への完全な服従と信頼の生活を、喜びをもって生涯実践したといわれる。

「私たちは地上のものではなく、天上のものに愛情を注がねばなりません。先ず神の国と神の義を求めなければなりません。その妨げになるものはすべて捨ててしまうのです。私たちはキリストが歩んだように歩まねばなりません。キリストの内にあった心を私たちも持たねばなりません。・・・お互いに対して親切で心やさしく、神が私たちを許したもうように許し合わねばなりません。」

次にタイトルになった話が紹介されている。アフリカの奥地で伝道していたある宣教師のもとに彼の父親が危篤だという電報が届いた。彼は大きく荷物をまとめ、現地人たちにそれを運ばせて、港に急いだ。山を越え、原野を横切り、沼地を渡るという一週間はかかる困難な旅だった。ある朝のこと、彼らは立ち上がるろうとしなかった。そして彼らのうちの一人がこう答えたという。「おれたちの体ばかりあんまりはやくきちまったので、魂が追いつかぬえんだよ。だから、魂が戻ってくるまで待っているわけさ。」

柳生は「これは無知な未開人の迷信的たわごとなどと言って片づけられるような問題ではありません。」と言う。福島第一原発事故のずっと前に、柳生は現代の問題性を予感し、これは「体（自然科学・技術）ばかりが進んでしまって、魂（倫理的自己規制）がついてこない悲惨さ」であると指摘した。そしてこう訴える。

「みなさんは次の言葉を聞いてどう感じますか。ご自分の反応を計ってみて下さい。奉仕・謙遜・義務・服従・忍耐・徳行・感謝・自己放棄・犠牲・聖性・自己否定。これらの言葉を聞いて、古くさいとか、けむったいとか、おれには関係ないとか感ずるようでしたら、あなたがたの魂はかなり体から離れていると言っているでしょう。

魂を引き寄せるとは、おれを捨てることです。自分さえよければよいという考えを捨てて、他者への奉仕に生きようとするのです。これは私が言っているではありません。キリストが言っておられるのです。『わたしは人びとから仕えてもらうためではなく、彼らに仕えるために来たのであり、また多くの人びとの身代わりとして自分のいのちを投げ出すために来たのである。』（マタイ20：28）

そして柳生はこう語る。「どんなに立派な校訓でも、それが実践に移されるのでなければ、空念仏に終わってしまうでしょう。どうかおたがいに、このすばらしい建学の精神を、少しずつでも実行するよう、努力して行こうではありませんか。」

（『いんまぬえる』1979年3月号、創立記念式典式辞）

「愛のよろこび」

ここでは柳生がコベル宣教師のことを取り上げている。

「コベル先生は大正9年ころ、関東学院にこられたアメリカの宣教師で、絶対平和主義者でありました。あるとき日本の友人が先生の息子さんにおもちゃの剣をプレゼントしたところ、先生は顔色を変えて、これを拒絶されたということです。

大正から昭和にかけて日本は次第に軍国主義に傾き、中学以上の学校には配属将校が置かれ、軍事教練が施されるようになりました。さて学院中学における第一回査閲の日、コベル先生は特に黒のネクタイを結んでおりました。ちょうど葬式のときのように。その理由は、『日本のために、またわが学院のために、もっとも悲しい時であるから。』ということだったそうです。

先生は生徒たちに、機会あるごとに、平和思想を吹き込み、反戦思想を強調したので、軍部や〈特高〉にいらまれ、ついに学院にも、日本にもいられなくなり、フィリピンに転任させられるに至りました。

やがて第二次世界大戦がはじまり、日本軍がフィリピンを占領、コベル先生は他の宣教師たちとイロイロ島（実際はパナイ島一注）の山の中に逃れましたが、とうとう日本軍に捕えられ、夫人および同僚の宣教師たち（10名ほど）と共に銃殺されたのでした。

アメリカにいてこの悲報に接した上のお嬢さんは、それまで学校の教師をしていたのですが、ただちに辞表を出し、日本人の収容所におもむきました。『両親が日本を愛し、その愛する日本人のために、その生涯をささげたのであるから、自分は両親の志をついで、日本人のために働く。』と言って、骨身をおしまず奉仕したとのことでありました。』

柳生はこの感動的な話を坂田祐の自伝『恩寵の生涯』から引用していることわっている。（コベル先生とそのお嬢さんたちの活動については、他の方も詳しく調べておられ、解釈も異なるので、ここではそのままの引用にした。一注）

さらに柳生は「南洋の食人種族の教化に殉教した姉妹」の物語と、「台湾の生蕃の教化にほとんど全生涯をささげた一教友のこと」（井上伊之助）を紹介している。そしてこのように校訓について説き明かす。

『『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。』（マタイ16：24）

コベル先生のお嬢さんとあの三人姉妹と井上伊之助さんは、この神様の命令に従ったのです。神様の要求に対しては、『われわれ凡人には縁がない』とか、『われわれは日本人なのだから』とかいったところで、まったく通用しないのです。』

『わたしはいま何の話をしているのか。じつは、関東学院の校訓、『人になれ、奉仕せよ』について話をしているのです。坂田先生によれば、この校訓は先生が天から与えられた次の二つの聖句から作られたものだそうです。

『人その友のために己の生命を棄つる、これより大いなる愛はなし』（ヨハネ15：13）

『かくのごとく、人の子の来れるも仕えらるるためにあらず、かえって仕うることをなし、また多くの人のあがないとして己が生命を与えんためなり。』（マタイ20：28）

ここには、『生命をすてる』『生命を与える』という死に至るまでの自己犠牲を示す言葉が見られます。つまり、コベルさんのお嬢さんも三姉妹も井上伊之助さんも、わが学院の校訓を徹底的に実践した人たちなのです。』

ここまで述べてきて、柳生は主題の「愛のよろこび」についてのトルストイの言葉を引用して結論を語る。

「トルストイは深い人生経験にもとづいて非常に大事なことを言っていますので、いましばらく彼の言うことを聞いてみて下さい。

『確実に幸福な人間になるために必要なことはただ一つだ。愛せよ、善人をも、悪人をも、すべての人を愛せよ。絶えず愛せよ、そうすれば諸君は絶えず幸福な人間でいられるだろう。』

私の一生は私のものではない。したがってまた、私の幸福のみがその目的でもありえない。私をこの世につかわした方、その方が欲することだけが、その目的でありうるのだ。

そこに、よろこびが存在するためである。やってみるがいい。そうすれば、諸君はそれが真実かどうか知るであろう。』

「つまり、『人になれ、奉仕せよ』は愛のよろこび、すなわち人生における〈完全な満足〉への道である、とトルストイが保証しているのであります。」

(『いんまぬえる』1984年3月号、創立記念式典式辞)

校訓の実践は悲愴で憂鬱な義務ではなく、喜びに満ちた活動である、と柳生は説く。

「仕える幸福」

関東学院創立百周年にあたり、その歴史をたどりつつ、柳生は建学の精神について語る。

「今から百年前の1884年にアメリカ・バプテスト教会の宣教師たちが横浜山手に、横浜バプテスト神学校を創立した。それがわが関東学院の始まりであります。その神学校の校長はA. A. ベンネット、教師はT. P. ポートとC. H. D. フィッシャーの2名、生徒は5名だったということです。キリスト教そのものの始まりが先生一人、弟子12人であったことが思い出されるではありませんか。」

まず柳生はベンネットの人物像について紹介している。

「ベンネット先生はじつに謙遜な、奉仕の人であったようです。1886年から23年間、横浜バプテスト神学校で旧約学を教えたC. K. ハリントン博士は、ベンネット先生の葬儀の式辞の中でこう述べております。

『彼はそのために自分の邸内に一軒の家を建てました。・・・長年のあいだ校長として尽されましたけれど、きわめて謙遜な方で《校長》の肩書きは受けようとしませんでした。——しかし、つねに学校の首席教授であり、校内の精神的主力となっていたことは、同僚の諸君もみなわたしと同感であると思います。・・・その地域の人々は一般に《ベンネット博士の学校》と呼んでおりましたけれど、あながち間違いではありませんでした。学校内における彼の存在、聖書に対する厳密な、愛をもって接する知識、熱心な福音主義の伝道精神、親切で巧みな学生への応対等、すべてが広範囲にわたって、この学校の生命であり、光であり、また力でありました。』

「もう一人の同僚、J. L. デーリング博士もこう語っ

ています。

『彼は一人の教師としてその人柄を学生の上に印象づけること甚大でした。日本中のバプテスト伝道師のほとんど全部が彼の手によって教育されました。神の言葉に対する忠誠と真理に対する敬虔な態度、さらに説教者の台本として聖書を重んじたこと等は、今日のバプテスト教職者に深く印象づけられたところでありました。・・・彼が学生を教えることに倦み疲れた姿を見せたことはありません。また学生が彼に質問して、彼の辛抱づよい行きとどいた解答を与えられずに終わった、というようなこともなかったようです。』

柳生は自分自身長年教師をしてきたので、ベンネットの人格と教師としての使命意識に深く感動し、共鳴していたのである。

次に柳生は横浜山手の外国人墓地にあるベンネットの墓について述べる。

「ベンネット先生は1909年10月12日に横浜の地で亡くなりましたが、外国人墓地のその墓碑にはHE LIVED TO SERVE. (彼は仕えるために生きた)と刻まれています。『彼は仕えるために生きた』—なんというすばらしい言葉でしょう。それはまた、うれしいことに、わが学院の校訓『人になれ、奉仕せよ』とまったく同じ精神を言いあらわしています。『人になれ、奉仕せよ』とは、要するに『仕えるために生きよ』ということではないでしょうか。私はすばらしい校訓を与えて下さった坂田祐先生を誇りに思っています。と同時に、わが学院のいしづえを据えて下さったベンネット先生をも誇りに思うのであります。坂田先生と云い、ベンネット先生と云い、こんなにすばらしい精神的指導者をわが学院に与えて下さった神様に、心から感謝しようではありませんか。そして人になって奉仕するよう、また仕えるために生きるよう、おたがいにいっそう努力しようではありませんか。」

(『いんまぬえる』1984年10月号)

ここでは、柳生は関東学院の二つの源流に立つ人物、ベンネットと坂田祐に最高の敬愛を示し、自分もまた二人の先駆者に習うこと、そして教職員と学生たちにも、そうするように、と訴えてやまないのである。

生い立ちとあゆみ

柳生直行は1920(大正9)年3月1日に横浜市保土ヶ谷区に生まれた。父親の名は柳生光異、母親の名は柳生そのといった。父親は牧師であった。「直行」の名前はホーリネス教会の指導者であった車田秋次がつけてくださったという。中等教育は藤嶺中学校(旧制)に学んだ。この学校は今日の藤嶺学園中学高等学校である。次に大阪外国語学校英語部に進学、1941(昭和16)年3月に同校を卒業した。この学校は、後に大阪外国語大学となった。さらに2007年から大阪大学に統

合されている。柳生はここを卒業後、東京文科大学英語英文科に入学した。終戦の年、1945年9月に同大学を卒業した。この大学は後に東京教育大学、さらに今日では、筑波大学になっている。柳生は卒業後、東京都立城南中学校（旧制）教諭、連合軍総司令部通訳部に勤務、さらに農林省農政局翻訳官として勤務、その後、正則学園高等学校および湘南白百合高等学校に非常勤として勤務した。1949年から1950年までニューヨーク市コロンビア大学で英語教授法を専攻した。

1952年4月に関東学院大学短期大学部英文科助教授（今日の准教授）、1955年4月には教授に昇進した。1958年4月には関東学院大学経済学部教授として移籍した。1961年4月には経済学部長に選任された。1966年、大学教養部長、1968年から文学部長には三度選任されている。1972年には副学長、1973年には図書館長、1978年には関東学院長に選任された。学院長就任後は、一時的に1978年には関東学院小学校と関東学院六浦小学校の校長を兼務、1980年には関東学院幼稚園長と関東学院野庭幼稚園長を兼務した。1985年3月にはアメリカのリンフィールド大学より名誉文学博士号を授与された。

柳生は関東学院に34年間勤務した。その間、その凌駕する学殖と魅力ある人間性をもって学生ばかりでなく、保護者にも強い感化を与えた。

経済学部長職と文学部長職の回顧

柳生は1961年から2年間、経済学部長に選任された。経済学部と工学部と神学部の時代のことである。柳生は「ふたむかし前のことども」と題するエッセイを『関東学院大学経済学部三十年史』に寄稿している。少し長いが、当時の大学の様子を垣間見ることができ、また柳生らしい文章なので、ここに紹介したい。

「私は現在文学部の英米文学科に所属する一介の英語教師に過ぎませんが、そんな私がかつて本学の経済学部長をやらされたことがあるのです。…当時の大学新聞から新任の挨拶を求められて、まず最初に、『柳生さんが経済学部長になったと聞いていちばん驚いているのは、当の柳生さん自身である』と書いたのを今でもよく覚えています。

私の学部長就任は任命ではなく、学部教授会の選挙によるものでしたから、内部からの反対はなかったように思いますが、とにかく異例なことなので外からの風当たりは相当強く、ESSのOBが出していた英文の新聞でしつこく叩かれましたし、学院上層部の一部においても『外に対して恥づかしい』という声があったという話です。『外に対して』で思い出しましたが、当時は横浜四大学連合会の活動が活発で、私も経済学部長として引っぱり出され、国大の越村信三郎、神大

の今は亡き大熊信行といったお歴々とよく同席させられたものでしたが、たぶん私にとって最初の会合のときだったでしょう、『実は、私、英文学が専門でして…』と申し上げると、すかさず大熊氏が、『いやあ、羨ましいですなあ。経済学なんてのは実に愚劣ですよ』といわれたのを今でもはっきり覚えています。恐らく彼は、経済学者たちに囲まれて小さくなっている私を激励するためにそう言ってくれたのでしょう。』

「今から振り返ってみると、校舎はおんぼろで学生数も全体で二千数百にすぎず、すべてが貧しく小さかったけれど、しかしある意味では古き良き時代であったと思います。当時の経済学部の看板教授は伊坂（市助一注）・大門（一樹一注）・山田（一郎一注）の三御大、そのあとに若手の助教授今野（国雄一注）・高野（利治一注）といった面々が控えておりました。現在の理事長で前学長の高野（利治一注）氏、また文学部の重鎮今野（国雄一注）氏の両氏が教授に昇格なさったのも、私の学部長時代でした。

それからもう一つ。経済学部の中に経営学科ができたのが昭和37年、私の任期中のことでした。たぶん現常務理事の永島敬識さんあたりが中心になって作られたのでしょうか。大変な御苦労だったと思いますが、私自身はその産みの苦しみに全然あずかっておりません。名前だけの学部長で本当に申し訳なかったと思っています。』

さらに結論では、むかしを懐かしく思い出してこう語る。

「現在の大学しか知らない人は、昭和36年ころの大学の姿を想像することもできないでしょう。大学も経済学部も本当に素晴らしい発展を遂げてきました。まことによるこばしいことです。が私のごとき old-timer はときどき、樋口のおじさんの鳴らす鐘を聞き、あの声のかすれたポート屋のおぼさんのなべ焼きを毎日たべたあの頃のことを、たいそうなつかしく思うのです。』

（『関東学院大学経済学部三十年史』1980年3月）

「樋口のおじさんの鳴らす鐘」は、かつて7号館のところに建っていた木造礼拝堂に取り付けられていた。おじさんが鳴らす鐘がチャペル・タイムを告げていた。平潟湾が大掛かりに埋め立てられる前は、正門前にポート屋があって、そこで出される鍋焼きうどんは当時としてはとても美味しかったのである。

柳生は文学部の新設には多大な貢献をした。柳生は「文学部新設のころ」と題して書き残しているのを、これを紹介したい。

「本学の歴史を振り返ってみると、経済・工学の二学部時代がかなり長かったように思う。後に神学部が創設せられ、社会・自然系列に文系が加わって一応体裁は整ったが、しかし文学部を欠いているという点で、

やはり変則的な学部構成であったといわねばなるまい。]

この前置きの後、社会学科は富田富士雄教授が担当し、英米文学科は柳生が担当して学部づくりを始めたこと、そして英米文学科の開設のためには次の方々に大変お世話になったという。

「特にお世話になったのは、当時明治学院大学教授であった三神勲先生（現在、駒澤大学教授）と、あのころうちの短大教授であった浅田寛厚さん（現在、青山学院大学教授）とである。昭和43年文学部発足の時点で、倉長真、沢崎九二三、竹中治郎というわが英文学界の三長老をそろえることができたのは、全く三神先生のおかげである。倉長先生にもカリキュラム編成のことで、たいへんお世話になった。それからもう一人、特にお名前をあげておきたい人がいる。それはウィリアム・エリオットさん（現在、リンフィールド大学教授（後に本学教授一注））である。彼はアメリカの大学のイングリッシュ・デパートメントのことをいろいろ教えてくれて、それがカリキュラム編成においてどれほど役立ったか知れない。」

柳生の英米文学科構想には、二つの柱があったという。ひとつは「英語の関東」といわれるにふさわしい、英語のできる学生をつくり出すこと。そのため教養英語の必要単位数を他大学の倍、すなわち16単位とした。今ひとつの柱は、英文学、米文学、あるいは英語学を頭で理解するだけでなく、体で感得させること。それには、きびしい訓練が不可欠であるという。柳生はパスカルの『パンセ』の冒頭に記された「繊細の精神」こそ、英米文学科で学ぶ者が体得し、かつ実現すべき基本精神であるとした。

「学生諸君に一番欠けているのは、この、言葉に対する繊細の精神である。そしてその欠如は人間性の欠落にまで進む危険をはらんでいるのである。」

そして柳生はこう提案する。

「繊細の感受力は訓練によって鋭くすることができるし、また鋭くしなければならぬのだ。」

（『関東学院大学三十年の歩み』1980年1月）

「父のこと、信仰のこと」

柳生は本学宗教センター発行の『告知板』で大島良雄大学宗教主任・文学部教授と対談している。また雑誌『あえーる』では高木幹太と対談している。そのタイトルが上記の小見出しの表現である。二つの対談から柳生の父親のこと、キリスト教信仰のことを拾い出してみたい。

「私のオヤジは小学校を出ただけで、鉄道省につとめておりました。まじめな男だったのでしょね。多分21歳のときだったと思いますが、神田で、ホーリネスの路傍説教を聴いて、感動を受け、クリスチャンに

なった。そしてしばらく淀橋にあるホーリネスの聖書学院に勉強に通ったようです。」

「ともかく、オヤジは信仰一筋に生きた人間でした。私にとって、父の影響というのは強かったですね。きびしさ、一本気のところがありましたから、こっちは批判するどころではないのです。」

今ふっと思い出したのですが、キルケゴールは『神は存在するか』という問いに対して『おやじがあると聞いたからあるよ』と答えたという話ですがね。私の場合もそれに近いですね。くそまじめなオヤジが、神さまがあるって言ったんだから、あるんですよ。これが私の信仰。」

柳生の父は1931年に鉄道省を退職して、茅ヶ崎で教会の開拓伝道を開始した。柳生は1933年12月24日にその教会で洗礼を受けた。中学1年生のころであろうか。父親はホーリネス教会の流れに属していたが、後にその教派から離れて、単立教会として宣教活動していた。

「オヤジのことでもうひとつ序に申し上げますが、ホーリネスの弾圧のことはご存じでしょう？ もしオヤジが、戦争中ずっとホーリネスに属していたら、当然刑務所に入れられて、心臓が悪かったですから獄死していたでしょう。ところがどういふわけか、ユダヤ人問題というのが起こりましてね。それで中田重治と意見が合わなくなったらしいんですね。ホーリネス教会を出て、それで生きのびたようなもんですよ。」

「ユダヤ人問題」というのは、ホーリネス教会の指導者であった中田重治が1936年9月23日にキリストの再臨とユダヤ人問題に関して、聖書学院の五人の教授たちに書簡を送ったことに端を発している。中田によれば、日本の太古の時代にユダヤ人が渡来していたこと、彼らと原住民が混血して今の日本人が生まれたという。それゆえ日本人は神の選民であるユダヤ人を支援し、ユダヤ人国家を樹立することに協力することが日本の使命であるとした。この日本人・ユダヤ人同祖論をめぐる、ホーリネス諸教会の間で論争が起こり、やがてその群れに分裂が生じた。

柳生の父親は茅ヶ崎市の湧泉教会を戦前・戦中・戦後の波乱の時期を守り通した。柳生は1950年に、40歳の時に、ここで正式に牧師として按手礼を受けた。父親の亡き後は、奥様とともにこの教会の宣教の使命を継承してきた。

1986年9月3日、柳生は地上の生涯を駆け足で通り過ぎてしまった。享年66歳であった。しかし優れた学問的業績とともに、人々の心の中に、キリスト教信仰の消えることのない灯火を残していった。

「あなたたちに神の言葉を伝え、あなたたちを導いてくれた人たちのことを思い、彼らの生涯を顧みて、その信仰を見倣うがよい。イエス・キリストは、きのうも、今日も、これからも、永遠に変ることのないお方である。」（ヘブル13：7。柳生直行訳）

柳生直行先生 著作目録

関東学院大学図書館主幹 高 梨 章

凡例

1. 目録の構成

- A 著書（単著） B 著書（共著） C 翻訳書（編注書含む） D 図書所収
E 事（辞）典等項目執筆 F 雑誌等掲載論文・記事

2. 記載の順序

- Aは、書名（副書名）、出版者、出版年、頁数、注記の順
B及びEは、書名（副書名）、共著（編）者、出版者、出版年、頁数、注記の順
Cは、書名（副書名）、原著者、出版者、出版年、頁数、叢書名、注記（原著書名、原著出版年等）の順
Dは、論題名、収載書名（编者、出版者、出版年、頁数）、掲載頁の順
Fの雑誌等は、タイトル、掲載欄名あるいは連載シリーズ名、誌（紙）名、巻号、発行年月（日）、掲載頁、注記の順

現物未確認資料については、タイトルの前に*を付した。

図書資料で、後に新版、新装版、改訂版等が発行されたものについては→で案内した。また、雑誌等から図書に収載されたものも→で案内した。

A 著者（単著）

- A 1 お伽の国の神学：C. S.ルイスの人と作品 新教出版社 1984 438p
A 2 生一本のキリスト教：お伽の国の倫理学 新教出版社 1987 265p
A 3 おのれを低くする者：柳生直行講話集 柳生直行[著]／関東学院理事会編 横浜：関東学院 1988 238p

B 著書（共著）

- B 1 *Modern American literature : an introduction* / by William I. Elliott and Naoyuki Yagyu
Tokyo: Shinozaki Shorin 1964 ii, 182p.
表紙タイトル：現代アメリカ文学論
本文言語：英語

C 翻訳書（編注書含む）

- C 1 神への渇き A. W. トウザー著 いのちのことば社 1958 133p
The Pursuit of God by Aiden Wilson Tozer (1948)
→ 新版 1990 142p
C 2 キリスト教の核心 C. S.ルイス著 キリスト者学生会出版局 1963 166p (KGK 新書；1)
Beyond Personality by Clive Staples Lewis (1952)
C 3 奇跡：信仰の論理 C. S.ルイス著 みくに書店 1965 5, 302p
Miracles by C. S. Lewis (1947)
→ 「奇跡論：一つの予備的研究」(柳生直行訳・山形和美改訂)『C. S.ルイス著作集2』(山形和美責任編集・監修 すぐ書房 1996 450p) 所収 p.7-310
C 4 ガスパール、密航者 コンラッド著 やしま書房 1965 167p (世界の古典. 第8)
Gaspar Ruitz (1908); *The Secret Sharer* (1912) by Joseph Conrad
C 5 天国と地獄の離婚 C. S.ルイス著 みくに書店 1866 219p (KGK 新書；9)
The Great Divorce - a dream by C. S. Lewis (1946)

- 『天国と地獄の離婚：ひとつの夢』 2006
- C 6 コリント パークレー著 ヨルダン社 1970 344p (聖書註解シリーズ；9)
The Letters to the Corinthians by William Barclay
- C 7 *Father and son* / Edmund Gosse; edited with notes by N. Yagyu, T. Sato
 Tokyo : Shinozaki Shorin, 1971 v, 112p
 奥付書名：父と息子
- C 8 幸福の心理学：不安と迷いをのりこえる信念の法則 ヴェニス・ブラッドワース著 大和書房 1972 216p
Golden Keys to a Lifetime of Living & the Key to Yourself by Dr. Venice J. Bloodworth (1960)
 → 新版(改題)『マインド革命：幸福への36章』(春秋社 2001 197p)
- C 9 希望と信頼に生きる：ウィリアム・パークレーの1日1章 ウィリアム・パークレー著 デニス・ダンカン(編) ヨルダン社 1974 430p
Through the Year with William Barclay: Devotional Reading for Every Day, ed. By Denis Duncan (1971)
- C 10 キリスト教の精髓 C. S. ルイス著 新教出版社 1977 358p (C. S. ルイス宗教著作集4)
Mere Christianity by C. S. Lewis
 → 新装版 1994
- C 11 スタイロン R. H. フォサム著 すぐ書房 1977 107p (英米文学批評叢書)
William Styron: A Critical Essay by Robert H. Fossum (*Contemporary Writers in Christian Perspective*) (1968)
- C 12 キリストの生涯 ウィリアム・パークレー原案・解説 イアン・リード脚本 エリック・フレイザー絵
 新教出版社 1977 99p
A Life of Christ, text by William Barclay, scripted by Ian Reid, cartoons by Eric Fraser (1977)
- C 13 天の都をさして ジョン・バニヤン著 ロバート・ローソン画 すぐ書房 1980 126p
 『天路歷程』少年版
Pilgrim's Progress by John Bunyan, illustrated by Robert Lowson (1939)
 → 『天の都をさして：『天路歷程』少年版』2001
- C 14 新約聖書 新教出版社 1985 558p (新教出版社創立40周年記念出版) (6刷；2004.11)

D 図書所収

- D 1 『失樂園』と現代 『神学と文学の間』(相川高秋教授在職三十五年記念論文集刊行委員会編 やしま書房 1965 278p) 所収 p.133-162
- D 2 現代文学とキリスト教 『キリスト教と文学』(関東学院大学・短大チャプレン会 1967 136p (関東学院大学・短大キリスト教双書；3)) 所収 p.22-45
- D 3 『失樂園』と現代 『ミルトン研究：17世紀英文学研究Ⅰ』(17世紀英文研究会編 金星堂 1974 ii, 216, 24p) 所収 p.3-18
- D 4 D. H. ロレンスとキリスト教 『キリスト教と文学第三集』(笹渕友一編 笠間書院 1975 247p (笠間選書 28)) 所収 p.135-154
- D 5 建学の精神について 『関東学院大学三十年の歩み』(1980.1 311p) 所収 p.4-5
- D 6 文学部新設のころ 同上 p.91-95
 → 『おのれを低くする者』1988
- D 7 シェイクスピア英語劇 同上 p.190-191
 → 『おのれを低くする者』1988
- D 8 関東学院六浦小学校 同上 p.260-261
- D 9 ふたむかし前のことども <歴代学部長の回想記> 『関東学院大学経済学部30年史』(1980.3 428p) 所収 p.24-25
 → 『おのれを低くする者』1988
- D 10 図書館入口の碑文について 『図書館利用の手引 1980』(関東学院大学図書館 1980 16p) p.1
 → 『おのれを低くする者』1988
- D 11 短大よ、永遠なれ！ <祝辞> 『短大三十年記念誌』(関東学院女子短期大学 1980.10 280p) 所収 p.4-5

- D12 *コルソン氏の講演を聞いて 『チャールズ・W・コルソン横浜講演会記録』(横浜 YMCA 日時／1981.5.15 場所／横浜開港記念会館大ホール)
- D13 はじめに 『関東学院100年1884～1984』(1984.10 52p) 所収
- D14 刊行のことは 『関東学院百年史』(1984.10 1032p) 所収 p.3
- D15 関東学院第二世紀への展望 同上 p.993-997
→ 『おのれを低くする者』1988
- D16 関東学院：A. ベンネット宣教師 『バプテスト教育の基礎を築いた人々』(日本バプテスト同盟宣教師教育委員会 1985 40p) 所収 p.29-33
- D17 仕える幸福 『道しるべ：関東学院とキリスト教教育』(関東学院編 ヨルダン社 1987 142p) 所収 p.24-30

E 事(辞)典等項目執筆

- E1 クエスチョン・ボックスシリーズ第14巻：風物 石橋幸太郎〔ほか〕編 大修館書店 1963 173p
本書240項目のうち 83. 西暦紀元 p.57 /142. 人種差別 p.95-96 /147. 「合衆国」か「合州国」か p.99-100 /148. 貴族などの敬称 p.100 /171. 侮べつ的な「…人」の表現 p.122 /176. Mrs.とMiss p.125-126 /177. Brother, sister p.126 /178. good-by p.126 /231. 聖書に由来する人名 p.158 /232. 聖書に由来する語句 p.159 /233. 旧約聖書と新約聖書 p.159-160 /234. キリスト教とユダヤ教 p.160 /以上12項目を執筆
→ 『英語語法大事典』(石橋幸太郎〔ほか〕編 大修館書店 1966 1754p 英文書名：*A Dictionary of Current English Usage*)。本書は『クエスチョン・ボックスシリーズ』全15巻を一冊にまとめ増補したもの。但し、「XIV 風物」には増補なし。執筆者名もなし。

F 雑誌等

- F1 T. S. エリオットの宗教思想 『短大論叢』(関東学院短期大学) (2) 1952.10 p.27-48
- F2 ミルトン私観 『短大論叢』(4) 1953.11 p.1-24
- F3 アメリカ人に於けるよき生活の探求 『短大論叢』(5) 1954.11 p.39-52
- F4 ジョン・ミルトンについて 『基督教文化学会年報』(2) 1955.3 p.19-20
- F5 ミルトン失楽園 <基督教文学> 『新生』(65) 1955.8 p.7
- F6 T. S. エリオットの詩劇(一) 『短大論叢』(9) 1956.12 p.35-52
- F7 *私の読書遍歴 『成美学園図書館便り』1957.7.20 p.1
- F8 T. S. エリオットの詩劇(二)：一族再会について 『短大論叢』(11) 1957.11 p.64-75
- F9 A Christian critic views modern Japanese literature *The Japan Christian Quarterly* 24(4) 1958.4 p.152-155
言語：英語
- F10 佐古純一郎氏の講演をきいて 『告知板』(関東学院大学チャプレン会) (3) 1958.5 p.4
- F11 Japanese moral thought and Christianity *The Japan Christian Quarterly* 24(4) 1958.10 p.322-329
言語：英語
- F12 C. S. ルイスの『悪魔の手紙』 『興文』(22) 1959.3 p.5-6
- F13 T. S. エリオットの詩劇：『カクテル・パーティー論』 『経済系』(関東学院大学経済学会) (44) 1959.11 p.15-31
- F14 T. S. エリオットの宗教と文学 『基督教文化学会年報』(7) 1960.3 p.22-25
- F15 現代英文学と基督教 <文学にあらわれた基督教信仰(1)> 『告知板』(関東学院大学チャプレン会) (22) 1960.5 p.4
- F16 ヘミングウェイの倫理 『短大論叢』(17) 1961.6 p.1-19
- F17 ヘミングウェイについて 『告知板』(33) 1962.1 p.3
- F18 *英会話談義 『テレビ英会話』(NHK) 1962.6/7 p.60-62
- F19 *ESS Activities 『NHK 英会話』(ラジオテキスト) 1962.10 p.60-61
- F20 老人と海 ヘミングウェイ作 <名作ダイジェスト> 『横浜消防』14(7) 1963.7 p.20-25
- F21 愛を求めて 『告知板』(関東学院大学チャプレン会) (45) 1963.7 p.1
- F22 読書案内：休暇中の読書のために 『告知板』(45) 1963.7 p.2

- F23 息子と恋人 D. H. ロレンス作 <名作古典の紹介> 『横浜消防』 14(10) 1963.10 p.26-31
- F24 D. H. ロレンスとキリスト教 『基督教文化学会年報』 (11) 1964.1 p.39-44
- F25 聖書と英語 『英語研究』 54(1) 1965.1 p.34-37
- F26 海と毒薬 遠藤周作作 <名作古典の紹介> 『横浜消防』 16(3) 1965.3 p.42-47
- F27 *現代人の神々 『キリスト者』(キリスト者学生会) 1965.5.5 p.3-4
- F28 *現代人の神々 二 『キリスト者』 1965.5.12 p.4
- F29 *現代人の神々 (三) 『キリスト者』 1965.5.19 p.4
- F30 グレアム・グリーン「事件の核心」のスコウビー <文学のなかのキリスト者像 6> 『月刊キリスト』 17(6) 1965.6 p.67-72
- F31 現代人の神々 『告知板』 (60) 1965.10 p.1,4
- F33 C. S. ルイス <人と思想と作品シリーズ> 『告知板』(関東学院大学チャプレン会) (67) 1966.11 p.5
- F34 禁断の木は自由の保証 <研究ノート> 『朝日新聞』 1967.2.22 (夕刊) p.7
- F35 新入生の諸君へ 『告知板』 (70) 1967.4 p.3 (新入生のために)
- F36 自由と抑制 <講座・くらしの教養> 『横浜消防』 18(10) 1967.10 p.18-23
- F37 文学部新設の意義と抱負 『告知板』 (79) 1968.5 p.2
- F38 On the Ancient Mariner 『文学論集：関東学院大学文学部英米文学会紀要』 (1) 1968.11 p.1-23
言語：英語
- F39 ヘミングウェイの倫理と宗教 『本の手帖』 9(3) 1969.5 p.32-42
- F40 An Aspect of Poe's Personality 『文学論集：関東学院大学文学部英米文学会紀要』 (2) 1970.1 p.1-5
言語：英語
- F41 [無題] 『香葉』(関東学院同窓会・香葉会) (1) 1970.12 p.11-12
- F42 C. S. ルイスの悪魔観 『月刊キリスト』 23(10) 1971.10 p.30-35
- F43 文学部の近況と展望 『燦葉』(関東学院燦葉会) (9) 1972.1 p.23-25
- F44 E. M. W. ティリヤード『ミルトン』 <影響を受けた本> 『英語文学世界』(英潮社出版) 7(8) 1972.11 p.32
- F45 イギリスの若者たち <Interval> 『英語研究』(研究社出版) 61(12) 1973.2 p.35
- F46 新言語学について 『昭和47年度総合コース』(関東学院大学文学部) 1973.5 p.15-42
- F47 英文学とクリスマス 『いんまぬえる』(関東学院) (1) 1973.12 p.4-5
- F48 現代批評の方法について 『紀要』(関東学院大学文学部) (12) 1974.7 p.1-15
- F49 C. S. ルイスと子供：ナルニア国物語をめぐって 『本のひろば』 (206) 1975.7 p.4-5
- F50 *倒れ伏して見あげるイエス (高木幹太『イエスはどのような方か』) <書評> 『北千住だより』 1975.9 p.4-6
- F51 図書館の現状と建設計画について 『関東学院大学ニュース』 (29) 1975.11 p.1
- F52 メアリのような女 『たより』(共立女子短期大学文科英語専攻) (17) 1975.11.10 p.4
- F53 リビングバイブルについて 『本のひろば』 (212) 1976.2 p.6-7
- F54 すばらしくない世界 『告知板』 (102) 1976.7 p.1
- F55 リンフィールド・カレッジとの姉妹校協定調印式に参加して 『関東学院大学報』 (33) 1977.1 p.1-3
- F56 詩の解釈の問題：『マクベス』の一節をめぐって 『紀要』(関東学院大学文学部) (20) 1977.3 p.13-25
- F57 C. S. ルイスの人と思想 『告知板』 (108) 1977.5 p.3
- F58 楽しい出会い：神のへり下りと、赦しということ (『キリスト教文学の世界⑧』；G. グリーン「事件の核心」
／モーム短編「サルバトーレ」他) <読書> 『キリスト新聞』 (1538) 1977.5.7 p.4
- F59 翻訳の技術とモラル 『本のひろば』 (228) 1977.6 p.8-10
- F60 C. S. ルイスの信仰と文学 『新教』 (25) 1977.7 p.16-21
- F61 おのれを低くする者 『いんまぬえる』 (14) 1978.7 p.1
→ 『おのれを低くする者』1988
- F62 二つの生き方 『いんまぬえる』 (15) 1978.12 p.6-11
- F63 「共同訳聖書」を読んで 『新教』 (31) 1978.12 p.20-23
- F64 クリスマス：神の悲しみの日 <クリスマスメッセージ> 『キリスト教学校教育』 (222) (316)
1978.12 p.1

- F 65 ジョージ・マクドナルド：神のおそば近く歩んだ人 <出会い・本・人> 『本のひろば』 (249) 1979.3
(表紙裏) 頁
- F 66 魂がついてこない 『いんまぬえる』 (16) 1979.3 p.4-5
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 67 西部劇と神様 『いんまぬえる』 (17) 1979.6 p.4-5
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 68 シェイクスピア英語劇について 『関東学院大学通信』 (6) 1979.10 p.10
- F 69 おとぎの国の神学 『いんまぬえる』 (18) 1979.12 p.4-5
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 70 とげのあるむち 『いんまぬえる』 (19) 1980.3 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 71 大学今昔(その1) 『関東学院大学通信』 (7) 1980.3 p.5
- F 72 老いて感謝を 『香葉』 (9) 1980.5 p.2
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 73 世界は何回建て? 『いんまぬえる』 (20) 1980.6 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 74 叱られ励まされる本 (A.W.トウザー著『神への渇き』 <わたしの一冊 18> 『いのちのこば』
(19) 1980.7 p.5
- F 75 クリスマスに考える 『いんまぬえる』 (21) 1980.12 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 76 児童文学とキリスト教 『新教』 (37) 1980.12 p.6-9
- F 77 美しく生きる 『いんまぬえる』 (22) 1981.3 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 78 クリフ・リチャードのことなど -神の選び- 『いんまぬえる』 (23) 1981.6 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 79 先ず一つの魂を 『バプテスト教報』 (257) 1981.11 p.1
- F 80 上からと下から 『いんまぬえる』 (24) 1981.12 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 81 天国と地獄 『いんまぬえる』 (25) 1982.3 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 82 すべてのこと感謝せよ 『いんまぬえる』 (26) 1982.6 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 83 デオテレベスになるな 『バプテスト教報』 (265) 1982.7 p.1
- F 84 人間の内側と外側 <連載1 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (樹林書房) (1) 1982.8 p.38-42
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 85 徳と現代人 <連載2 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (2) 1982.9 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 86 人間のいやらしさ <連載3 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (3) 1982.10 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 87 建学の精神を求めて(昭和57年度入学式式辞) 『関東学院大学通信』 (12) 1982.10 p.2
- F 88 服従の美学 <連載4 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (4) 1982.11 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 89 中世のころ <連載5 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (5) 1982.12 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 90 クリスマスでないクリスマスのお話 『いんまぬえる』 (27) 1982.12 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 91 おバカさんたち (I) <連載6 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (6) 1983.1 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 92 英文学と聖書 <文学の中の聖書> 『世の光』(日本バプテスト女性連合) 36(1) 1983.1 p.18-21
- F 93 模索する文学者たち <対談> 柳生直行・岡松和夫 『あえーる』 (7) 1983.2 p.18-34

- F 94 おバカさんたち (Ⅱ) <連載7 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (7) 1983.2 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 95 すばらしくない世界 <文学の中の聖書> 『世の光』 36(2) 1983.2 p.18-21
- F 96 わが青春、わが文学 <対談> 柳生直行・岡松和夫 『あえーる』 (8) 1983.3 p.20-34
- F 97 神より愛を込めて <連載8 お伽の国の倫理学> 同上 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 98 知恵と知識 『いんまぬえる』 (28) 1983.3 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 99 孤独な娘 <文学の中の聖書> 『世の光』 36(3) 1983.3 p.18-21
- F 100 狂気の現代 <連載9 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (9) 1983.4 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 101 減びたくなければ <連載10 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (10) 1983.5 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 102 逆転の思想 <連載11 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (11) 1983.6 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 103 信仰・学問・お伽話 『告知板』 (157) 1983.6 p.1-4 (文責：大島) [インタビュー]
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 104 上を向いて歩こう <連載12 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (12) 1983.7 p.26-31
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 105 危険な思想 『いんまぬえる』 (29) 1983.7 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 106 ヘミングウェイ <文学の中の聖書> 『世の光』 36(7) 1983.7 p.19-23
- F 107 良い木は良い実を結ぶか (マタイ7・15~20 マタイ12・33) <第2日目礼拝説教> 『キリスト教学校教育』 (270) (364) 1983.7.15 p.2
- F 108 ロレンスによる福音書 <文学の中の聖書> 『世の光』 36(8) 1983.8 p.17-21
- F 109 T. S. エリオットの詩劇『一族再会』 <文学の中の聖書> 『世の光』 36(9) 1983.9 p.20-24
- F 110 科学的天才と宗教 <連載13 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (13) 1983.9 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 111 刺あるムチと奴隷道徳 <連載14 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (14) 1983.10 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987 (「刺ある策と奴隷道徳」と改題)
- F 112 お伽の国の住人 <連載15 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (15) 1983.11 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 113 これからどうなる <連載16 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (16) 1983.12 p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 114 光のお祭り 『いんまぬえる』 (30) 1983.12 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 115 哲学最後の問題 <連載17 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (17) 1984.1 p.8-13
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F 116 私の大学論：キリスト教大学の独自性 <大学部会研究集会：“キリスト教大学の独自性”とは> 『キリスト教学校教育』 (275) (369) 1984.1 p.2
- F 117 むずかしいからやる 『LL NEWS』(関東学院大学語学演習室) (2) 1984.1 p.1
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 118 世の終わり：精神の荒廃と現代 (2) <講演> 『あえーる』 (18) 1984.2 p.4-20 (1983.10.15 於東京 YWCA 講堂)
- F 119 神の存在証明：父の信仰・ルイスのこと <インタビュー> 『あえーる』 (19) 1984.3 p.25-40 (インタビューアー：高木幹太)
- F 120 愛のよろこび 『いんまぬえる』 (31) 1984.3 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F 121 自分がいちばん可愛い：エゴイズムについて (Ⅰ) <連載18 お伽の国の倫理学> 『あえーる』 (20) 1984.4 p.35-40

- 『生一本のキリスト教』1987
- F122 地獄の原理：エゴイズムについて（Ⅱ）＜連載19 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（21）1984.5
p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F123 わたしは違う：エゴイズムについて（Ⅲ）＜連載20 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（22）1984.6
p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F124 真我と小我：エゴイズムについて（Ⅳ）＜連載21 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（23）1984.7
p.31-36
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F125 古いものはダメか？＜私は思う＞ 『経済スポット』（神奈川経済研究所）（191）1984.7 p.2
- F126 ああ、我悩める人なるかな：エゴイズムについて（Ⅴ）＜連載22 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（24）1984.8 p.32-37
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F127 跡を消す：エゴイズムについて（Ⅵ）＜連載23 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（25）1984.9
p.35-40
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F128 たたみの上では死ねない：エゴイズムについて（Ⅶ）＜連載24 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（26）1984.10 p.36-41
→ 『生一本のキリスト教』1987（「畳の上では死ねない」と改題）
- F129 仕える幸福 『いんまぬえる』（33）1984.10 p.2-3
→ 『道しるべ』1987／『おのれを低くする者』1988
- F130 エゴイズムからの解放：エゴイズムについて（Ⅷ）＜連載25お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（27）1984.11 p.34-39
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F131 悪魔的なもの：エゴイズムについて（Ⅸ）＜連載26 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（28）1984.12 p.34-39
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F132 権利意識と天国：エゴイズムについて（Ⅹ）＜連載27 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（29）1985.1 p.40-45
→ 『生一本のキリスト教』1987
- F133 キリストに従う（一）：エゴイズムについて（Ⅺ）＜連載28 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（30）1985.2 p.38-43
→ 『生一本のキリスト教』1987（「自然に逆らって」と改題）
- F134 創立100周年記念式典挨拶 『関東学院大学通信』（17）1985.2 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F135 キリストに従う（二）＜連載29 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（31）1985.3 p.63-68
→ 『生一本のキリスト教』1987（「真理を知った者」と改題）
- F136 新教出版社創立40周年記念に『新約聖書』（柳生直行師翻訳）を出版＜出版トピックス＞＜インタビュー＞ 『クリスチャン新聞』（912）1985.3.24 p.10
- F137 評に答えて＜柳生直行訳『新約聖書』をめぐる＞ 『キリスト新聞』（1935）1985.4.6 p.4（木下順治氏の評に対するもの）
- F138 T.S.エリオットとキリスト教＜論談＞ 『あえーる』（32）1985.5 p.4-17（第2回あえーる講演会に於ける講演）
- F139 T.S.エリオットとキリスト教（Ⅱ）＜論談＞ 『あえーる』（33）1985.6 p.4-17（第2回あえーる講演会に於ける講演）
- F140 キリストに従う（三）＜連載30 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』（34）1985.7 p.41-46
→ 『生一本のキリスト教』1987（「神との平和」と改題）
- F141 イエスはどのようなお方か 『いんまぬえる』（35）1985.7 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988

- F142 キリストに従う（四）＜連載31 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』 (35) 1985.8 p.34-39
→ 『生一本のキリスト教』1987（「主人を選ぶ」と改題）
- F143 人間とは？（Ⅰ）＜連載32 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』 (36) 1985.9 p.32-37
→ 『生一本のキリスト教』1987（「人間とは何か」と改題）
- F144 人間とは？（Ⅱ）＜連載33 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』 (37) 1985.10 p.14-19
→ 『生一本のキリスト教』1987（「中間の道」と改題）
- F145 人間とは？（Ⅲ）＜連載34 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』 (38) 1985.11 p.16-21
→ 『生一本のキリスト教』1987（「神と等しくなりたい」と改題）
- F146 人間とは？（Ⅳ・Ⅴ）＜連載35 お伽の国の倫理学＞ 『あえーる』 (39) 1985.12 p.24-34（『あえーる』はこの号を以て休刊）
→ 『生一本のキリスト教』1987（「ブレーキを働かせる」および「神の僕・神の子」と改題）
- F147 喜びの音信を伝える者の足はいかに美わしきかな 『いんまぬえる』 (36) 1985.12 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F148 白山源三郎先生の偉大なる足跡を憶う 『燦葉通信』（関東学院大学燦葉会）(16) 1985.12 p.3-4
- F149 『新約聖書』：日本語訳の在り方 ＜座談会＞ 柳生直行・川村二郎・太田愛人・松信泰輔 『有鄰』 (217) 1985.12.10 p.1-3
- F150 パラダイム <ずいそう> 『キリスト新聞』(1972) 1985.12.25 p.2
- F151 二つの幸福：卒業してゆく諸君へ 『いんまぬえる』 (37) 1986.3 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F152 おしゃべり <ことばの意味> 『説教者のための聖書講解』（日本基督教団出版局）(54) 1986.3 p.83-88
- F153 [中村妙子著] アガサ・クリスティの真実 <本・批評と紹介＞ 『本のひろば』 (335) 1986.5 p.20-21
- F154 聖人の門に遊ぶ 『告知板』 (180) 1986.6 p.2-3
→ 『おのれを低くする者』1988
- F155 「高価な真珠」（聖書／マタイ13・45, IIコリント11・24-29） 『告知板』 (182) 1986.10 p.2-3（最後の説教）（文責：松本昌子）
→ 『おのれを低くする者』1988



▲故柳生直行先生ご自宅書斎の蔵書（一部）2001年8月28日、瀬沼達也撮影

柳生直行文庫の紹介

関東学院大学図書館運営課文学部分館担当課長 大川 裕 一



柳生文庫誕生の経過

柳生文庫は学院長、文学部教授として関東学院の発展に尽力された故柳生直行先生が長年に渡り研究に使用された貴重な資料をご寄贈いただき大学図書館の個人文庫として新たな役割をもって誕生した。

個人文庫としての受入れは、2003年より準備を開始し、内外への情報公開を可能にするためのデータベース化や、図書館用装備を経て、2004年度より柳生文庫として図書館文学部分館に配置されている。

大学図書館では、一般の資料と共に、柳生文庫をはじめとする個人文庫や、コレクション資料等の所蔵資料を利用者に提供をしている。

柳生文庫のような個人文庫を図書館で受入れて利用者へ提供する場合は、最初の段階でその資料が個人文庫として有用であるか十分に検討を行なう。柳生文庫の場合は、故柳生先生が研究に使用された専門分野の貴重な資料が多く含まれ、それらの資料を生かした利用効果も見込まれるために個人文庫としての設置が決定された。これにより柳生文庫の情報を内外に対し公開するためのデータベース化経費を準備し対応を進めた。

図書館への受入れ

研究者の書棚は、研究内容に沿って独特の配置がされている例が多い。柳生文庫の受入れ準備の際に資料の状況を確認する機会があった。柳生先生が使用されていた書斎には生涯の研究としてきた英米文学、キリスト教関係資料を中心に天井まで資料が収まり研究者を取り巻くように配置されていた。また、一部の資料はベットの傍らまで連なり研究と生活が密着していた様相が窺えた。図書類とは別に多数の研究資料、貴

重な原稿等が隣接する教会に及ぶ範囲に渡り配置され生涯を研究に取組まれた足跡が残されていた。

このように長年研究に使用された多数の資料の中から図書館の個人文庫を形成する資料の選定を行い個人文庫への組替え作業を進めていった。

利用される柳生文庫

大学図書館の所蔵資料は、教育、研究を目的に管理、提供されている。柳生文庫として構成された資料は、他の図書館資料と共に検索対象となり利用要望に応えることが可能となった。柳生文庫の資料には専門分野の研究に役立つ資料が少なくなく研究者に利用されている。

現在、大学図書館では社会貢献の一つの形として所蔵資料や大学の成果物の情報発信を実施している。柳生文庫についても資料の全てをデータベース化することにより外部からの検索を可能にし公開性ある存在となっている。柳生文庫には専門分野の資料も揃っているために同じ研究テーマを持つ学外の研究者にとっても貴重な存在となっている。また絶版等により入手が困難な資料も多く揃っている点でも好評を得ている。

柳生文庫の構成

柳生文庫は、個人文庫としての規模は大きくないが特定分野の資料が揃っている点で研究を進める利用者からの評価も得ている。文庫構成の内訳は、和書：705冊、洋書1,742冊、合計2,447冊となっている。資料を内容別に分類すると、文学関連分野が全体の約6割を占め、その中でも英米文学のものが全体の半数近くとなっている。この点は英米文学者として研究をされた柳生先生の足跡が窺える。その他の分野では、哲学、心理学、倫理学、道徳、歴史、キリスト教関連等の資料がある。また、英米文学研究者としてC. S. Lewisを始めとする研究・翻訳に従事されると共に、単立キリスト教会の牧師として聖書の研究を進め個人による新約聖書日本語訳を成し遂げられた足跡も文庫構成の内容から窺える。このような性格をもった柳生文庫の存在は、今後も広く一般研究者を含めての利用にも対応が可能であり学術的貢献面での効果も期待ができる。

タッピング一家と宮沢賢治

—キリスト教の賢治への影響を考察する—

学院史資料室 瀬沼達也

「ビジテリアン大祭」は『新編 銀河鉄道の夜』に収められている。この童話の中には興味深い名前の人が二人、いずれも2回登場する。ウィリアム・タッピングとヘンリー・デビスである。前者は祭司次長であり、後者は祭司長である。同書編者の天沢退二郎の注にこうある。

ウィリアム・タッピング

創作人名であるが、「タッピング」という姓は、1908年盛岡浸礼教会に赴任したアメリカ・バプテスト教会宣教師で、盛岡高等農林の英語教師もつとめたヘンリー・タッピング Henry Topping (1857-1942) から借りたものにちがいない。タッピング師一家のことは文語詩「岩手公園」にうたわれている。

そのタッピング一家は関東学院と関係が深い。ヘンリーは関東学院の源流である東京中学院・東京学院の教授を務め、関東学院として再出発した時にも、一時期、教えた。温厚な人柄のゆえに「ファーザー・タッピング」として人々に尊敬されていた。また、後年に中学関東学院の初代院長に就任する坂田祐をキリスト教に導いた宣教師でもある。その夫人、ジェネヴィエヴも親日家で「マザー・タッピング」として多くの人達から慕われた。令息、ウィラードは戦前と戦後、関東学院で教え、後年には理事も務めた。令嬢、ヘレンは日本のYWCA活動に従事し、後にキリスト教社会運動家、賀川豊彦の秘書も務めた。

『新編 宮沢賢治詩集』も編集した天沢は、その注で次のとおり記している。

岩手公園

下書稿(一)ではまだタッピング一家は登場せず、「誰にもあらぬ人を恋ふ」少年の独白体であった。

タッピング

ヘンリー・タッピング Henry Topping (1857-1942) 盛岡浸礼教会牧師。盛岡中学で賢治はこの牧師に英語を習い、また教会へバイブル講義を聴きに行った。

関東学院大学金沢八景キャンパスにこのタッピング一家を記念する池がある。その中に2006年3月に新設された「タッピング・ポンド」銘板が立っている。(設置趣旨と詩「岩手公園」は掲載写真を参照)

詩作の際にインスピレーションが湧くためには、必ず詩人がこころを動かされる原体験がある筈である。賢治は晩年、自宅で病床に臥しているとき、最期の力を振り絞って、今まで創作してきた詩を推敲しながら清書した。「自分が死んでもこの詩がある。」とその理由を記している。

賢治が選んだ「文語詩 一百篇」(実際は101篇)の第2番目に「岩手公園」が置かれている。そして101篇の中に「父」と題する詩はない。なぜだろうか。賢治は熱心な法華経信者であり、遺言で「国訳の妙法蓮華教」を1,000部づくり配布してほしいと父に頼んだ。そうであれば、キリスト教宣教師家族のタッピング一家を詠った詩「岩手公園」を「母」に次いで第2

番目に選んだ理由はなんであろうか。

『【新】校本宮沢賢治全集第十六巻(下)補遺・資料(年譜篇)』には1933(昭和8)年37歳の賢治の臨終の様子が克明に記されている。ここで注目したいのは、父から褒められた賢治が、弟の清六に微笑してこう語っている言葉である。「おれもとうとうおとうさんにほめられたもな」そして母からもらった水をうれしそうに飲み、「ああ、いいきもちだ」と二回繰り返した。その直後に息を引き取ったのである。

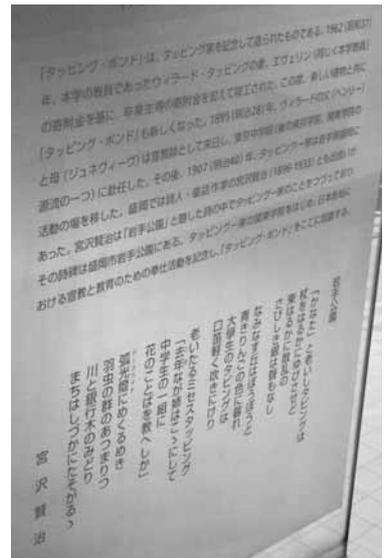
前述の文語詩の第42番目に「われのみみちにたゞしきと」と題する詩がある。

われのみみちにたゞしきと、
ははのなげきをさげすみて、
こゑはむなしく息あへぎ、
あせうちながしのたうてば、
下品ざんげのさまなせり。

ちちのいかりをあざわらひ、
さこそは得つるやまゆゆゑ、
春は来れども日に三たび、
すがたばかりは録されし、

もしも、賢治が数週間でも生きながらえていたら、「父」あるいは「家族」をテーマにした詩を詠んだのではなかろうか。同じ仏教でも宗派が父の浄土真宗とは異なり、法華経信者である賢治は苦しみ続けていた。しかし、臨終の際になって、父から褒められてどんなに嬉しかったであろうか。ここに筆者は父子の和解を見る。賢治の父に対する気持ち、家族に対する憧れを「岩手公園」に感じるのである。これこそが、信ずる宗教が異なるにもかかわらず、賢治がクリスチャン一家を詩に詠み、最晩年にその詩を大切な「母」の詩の次に選んだ理由であると考えられる。ここにキリスト教の賢治への影響を見るのである。

2011年3月11日に東日本大地震・大津波が起こった。この未曾有の大災害により、賢治の作品が改めて脚光を浴びている。特に詩「雨二モマケズ」である。国際社会からもそのメッセージは、日本人の美徳の象徴の詩であるような扱いを受けている。この詩は、賢治の死後に発見された手帳に鉛筆書きで、文字によっては赤字と青字でメモのように記されていたものである。公表するためではなく、自分の生きる指針として書いたものと思われる。この詩にもキリスト教の影響があるが、その考察展開は、紙幅の都合により、別の機会に譲りたい。



【参考文献】

- ・宮沢賢治著、天沢退二郎編『新編 宮沢賢治詩集』新潮社発行、文庫版2011年41刷改版
- ・宮沢賢治著『新編 銀河鉄道の夜』新潮社発行、文庫版2011年57刷
- ・『【新】校本宮沢賢治全集第十六巻(下)補遺・資料(年譜篇)』2001年12月10日、筑摩書房発行
- ・『新修宮沢賢治全集第六巻』1980年2月15日、筑摩書房発行

柳生直行先生と関東学院シェイクスピア英語劇

関東学院 学院史資料室 瀬沼達也

柳生直行先生は、1952年から1986年までの34年間、関東学院シェイクスピア英語劇の活動をとおして主に総監督として千人を超える学生をご指導下さった。

紙幅の関係で詳述できないのが残念であるが、できるだけ柳生先生ご自身の言葉を引用し、先生がなぜこのシェイクスピア英語劇の活動に情熱を注がれ、命を削ってまで指導されたかを記録に留めたいと思う。

関東学院シェイクスピア英語劇は、関東学院女子専門学校(関東学院女子短期大学の前身)時代の1948(昭和22)年に、三春台校地の講堂において上演された『ヴェニスの商人』から始まった。この英語劇は、「学校の名物となるものを何か行いたい」との相川高秋校長(当時)の願いから生まれたものである。当初、英語指導は光畑愛太先生(元女子短期大学教授)が担当、演技指導には兵藤正之助先生(元文学部教授)が協力した。

1954年、短期大学は六浦校地に移転したが、シェイクスピア英語劇は継続して行われ、翌年からは大学との共催行事となった。

2003年からは、女子短大の人間環境学部への改組転換により、大学主催により公演が行われるようになり、それ以降現在に至るまで毎年上演し続けている。

柳生直行先生のこの英語劇とのかかわりは、1952年に始まる。短大助教授に就任と同時に英語劇の指導に加わり(1958年から総監督)、1986年に召天されるまでの34年間、信念をもって学生たちを厳しく指導された。

1973年の合宿中のことである。『ロミオとジュリエット』の1幕1場の稽古中、先生はロミオの友人役に配役された学生の台詞の発音と読み方の指導をされた。しかも朝から晩まで一日中、数行の台詞のために自ら数え切れない程の回数を模範を示し、「バックヤロー! 何度言ったら分かるのだ」と楯を飛ばしながら。「注意を受けている奴は判らなくなってしまうんだ。分かっている周りの者がなぜ教えてやらんのだ!」とも。決して妥協されなかったため、ついに夜の稽古が終わってもその場面はそれ以上進まなかった。「1幕1場はカットだな」と一言述べられ、その日の稽古は終了した。学生たちは1幕1場がカットされたら、ロミオの初登場場面がなくなってしまうが、と心

配していた。

翌朝、稽古を再開したときに先生から思いもかけぬ言葉をいただいた。「1幕1場を守る会の会長はオレだ」と。

三浦半島ケープシャトーでの合宿中、日曜日が含まれているときは、その午前中に先生は学生はもちろん参加した卒業生も集めて主日礼拝の説教をされた。

柳生先生のご自宅で稽古をした時があった。自宅と言っても同じ敷地内にある単立湧泉教会の礼拝堂であった。先生は牧師もされていたからである。

柳生先生はこうに言われた。「関東学院のシェイクスピア英語劇は、一年に主役をやらせて、脇役は皆上級生にやらせることにしている。他大学は主役だけうまくて脇役が下手だ。だがうちは違う。そのほうが芝居がしっかりしてくるからだ。」

「学生は勉強するのはもちろんだが、それだけではだめだ。シェイクスピア英語劇のような活動をし、充実した学生生活を送ることが大切だ。」と折に触れて学生たちに助言された。

1980年に学生が集まらなく、しかも夏の時期に主要な登場人物の配役替えをせざるを得ない状況であった。なんとか公演は行ったが、今回は最期という思いだったことを後日、先生から直接伺った。「シェイクスピアを辞めるのは、母親が胎児をおろすような辛さだ」

同年の暮れのことである。柳生先生は大工の棟梁が弟子の職人を育てるように学生を厳しく指導することで有名だった。ある日、先生から筆者が呼び出されてこう言われた。「オレは今更スタイルを変える訳にはいかない。お前は学生の後ろに回ってやさしい言葉でもかけてくれ。」

1986年9月3日に柳生先生が召天された以降も、2012年の現在に至るまで合計で39年間シェイクスピア英語劇に筆者が携わっている一番の理由は、先生から最晩年に直接「瀬沼、シェイクスピアの後を頼む」と、ご遺志を継ぐことを任されたからである。

「人との出逢いが人生を変える。」これは真実の言葉である。「関東学院シェイクスピア英語劇の歩み」についての詳細は、次のHPに掲載されているので、そちらをご参照願いたい。

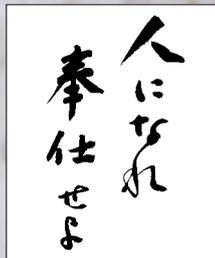
<http://home.kanto-gakuin.ac.jp/~kg108203/index.html>



資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。



関東学院 校訓

編集後記

1984年、柳生直行先生のC・S・ルイス研究の集大成である『お伽の国の神学—C・S・ルイスの人と作品』がキリスト教専門出版社の新教出版社から上梓された。翌年、先生の個人訳『新約聖書』が同社創立40周年記念出版物として出版された。この二冊の発行を知り、1985年に編集室は関東学院大学・関東学院女子短期大学シェイクスピア英語劇研究会の卒業生に声をかけて、関東学院大学葉山セミナーハウスで小さな出版記念祝賀会を開催した。柳生先生はもちろんご臨席下さった。ご挨拶の中でとても印象に残っているお言葉がある。『「新約聖書」と『お伽の国の神学』の出版記念会を開いてくれてありがとう。特に読んでほしいのは『お伽の国の神学』だ。これにはわたしの言い遺しておきたいことをすべて書いておいたから。」

不思議なこと連続でこの柳生直行先生特集企画が立てられ、奇跡的なことが連続して起こってこの『ニュース・レター』が完成した。イエス・キリストの父なる神様に感謝するとともに、全面的にご協力下さった柳生二三様、ご執筆並びに転載のご承認をいただいた諸先生方、株式会社 新教出版社様、日本基督教学会様、株式会社 教文館様、教職員の皆様にご場を借りてごところよりの御礼を申し上げます。(学院史資料室・瀬沼達也)

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第15号 発行日 2012(平成24)年1月31日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932